

◎倭約の眞意義
駿府にて二三年の間、倭約のことありて、正信命を受けて、奉行しけるに、其年の門松、例年より大きくして、又正月三日、謠初の節、間毎く、に燈す蠟燭、例年より格別太くありしかば、家康、正信を召て、兼々倭約を申付たる所。松の大きなる、蠟燭の太きは如何ぞと尋らる。正信畏て個様なる御規式の事共を、立派に仕らんと兼ねて倭約仕り候と申ければ、機嫌斜めならずとぞ。〔本多佐渡守逸事〕
倭約の要は、有用に資せんが爲めに、無用を節するにあり。彼の國家有用の事業を、倭約の二字を以て、抹殺するが如きは、眞に菽麥を辨ぜざるの徒と謂ふ可し。

拂暑快文

殘熱人に迫り、恰も儂を蒸殺せんとす。編輯案頭、米國大統領ルーズウェルト氏の論文集を讀む。亦た是れ一服の清涼散たらずんばあらず。ル氏は世の所謂る文人にあらず、然も彼は文字に於て、決して練達ならずとせず。但だ彼は説かんが爲めに書かず、爲さんが爲めに書く。故に其の言ふ所鑿々として、一として時務に精切ならざるなし。其の文光明、質直、大斧を揮ふて、巨竹を割くが如く。高峯に登りて、四野を下瞰するが如く。爽快の氣、勃々として行間に溢る。愛誦の餘、其の數片を譯して、記者と境遇を同ふする君子の清覽に供すと云爾。

◎眞正の慈悲心

吾等は、廣き仁愛、深き慈善、及び同胞人類に對する誠情的親切の精神を有せざるべからず。而して同時に、此の精神は實に、單純なる感情主義、乞食根性を増長せしめ、貧者をして益と貧ならしむるが如き博愛、及び愚弄的慈悲心、若しくは階級的愛憎の念によりて作られたる慈善の法律と、絶對的に反對のものなるを記憶せざるべからず。吾等は、正義の精神と、努力の眞正の目的を、安逸に於て認めずして、勞作に於て認むるの精神とを有せざるべからず。

慈善の賊は、非合理的の慈善也。他人に或物さへ分與すれば、それて慈善の目的は、達せられたりと爲すは、大いなる僻見也。眞の慈善は、各個人をして、各自に自治自活せしむるにあり。

◎好少年、好兒童

兒童として善良なるもの、最もよく好人物となるを得。善良なる兒童

とは、溫和なる兒童にあらずして、純良なる性質を有する好兒童なり。好兒童とは、消極的道德のみを愛する兒童にあらずして、積極的道德をも併せて愛するものならざるべからず。最廣の意義に於て、『善』は美はしきもの、清きもの、眞直なるもの、大膽なるもの、大丈夫らしきもの、凡てを包含せざるべからず。

余が知る所の最好の兒童、最好の人物は、學事に於ても、事務に於ても忠實なると同時に、事に臨んで大膽にして恐れを知らず、凡ての奸惡なる者、及び墮落せる者より恐れられ且つ憎まる。而して彼等は惡事には屈する能はず、弱きもの及び憐れなるものに對しては、溫情を注がざる能はず。健全なる精神を有する兒童は、必ず怯懦なるものに向て衷心輕蔑の情を起し、また女兒に無禮を加へ、年少者を苦しめ、動物を虐待するが如き兒童に向ては、殊に強き憤怒の念を發す。怯懦を憎ま

男らし
き児童

ざるべからざる一の重要な理由は、善良なる児童は皆な、必要の場合に、悪童を打ち退くるの勇氣を有せざるべからざるが故なり。

勿論児童は十分男らしく、十分正直公正ならば、其の同齡の朋友及び年少者より殆んど無量の尊敬を受く。若し彼にして、十分男らしからざらんか、朋友は決して彼を尊敬せざるべく、彼の性質の善良なる部分も、殆んど顧られざるべし。若し彼にして卑劣残忍奸悪ならば、勿論彼の體力と智力とは、只だ彼をして社會の有害なる分子たらしむるのみ。若し彼にして強からず、全力を以て敵に對する能ずんば、善事をなす事能はざるべし。若し彼にして、十分自己及び自己の惡情を支配する能はず、また正義公正の味方に立ちて盡す能はずんば、彼の力は彼の爲めに禍たるのみ。

之を要するに、人生に於ては、尙ほフットボールに於けると同じく左

の原則に従はざるべからず。『強く決勝線に向て蹴込め、不正直なる手段を弄する勿れ、また決して怯懦なる勿れ』。

世の教育家、斯言を精讀百回せよ。必らず得る所あらむ、必らず會する所あらむ。

◎經世家の要

米國最大の經世家は、皆な深く國民を信じたる人物なりき。我國の國民が、世界諸國民の中に於て、最大最強の國民となるまで、發達し膨脹すべき實力を有する事を信じたる人物なりき。

自國民の運命を信ずると能はずして、焉んぞ國民の先導者たるを得ん乎。

◎品性

國民にも、個人にも、必要缺くべからざるものは、品性なり——爲し、

經世家の要

品性

敢てし、耐ゆるの品性なり。善行に向て進取的にして、惡事若しくは卑劣なる事を排斥するに、堅確なる品性なり。爲し、敢てし、耐ゆる、此の三個の要素に注目せよ。大國民の資格は、固より此裡に存する也。

極秘卷

頃ろ坊間に於て、『一心相傳極秘卷』なる冊子五卷を獲たり。明和七年寅正月、奥州半田山人阿部驍麿なるもの、著述と云ふ。卷中間ま挿畫あり、筆者北尾重政にして、俗中自から雅味あり。而して其の所謂極秘卷の極意なるものは、如何にも大層なる題目を設け、其の解説する所、平々として、却て其の奇ならざる所に、人を噴飯せしむるものなからず。驍麿の名、空しからざる也。今試みに其の二三を、左に摘録す。要するに亦た銷夏の一樂事たらむ。

◎一間間口の裏店にて二千百六十八人の膳立の妙術

夫婦二人住居の裏店にても日に三度宛食盤にすわる事は風雨を嫌はずかけめなし夫婦にては一日に則六人の客なり月に百八十人一ヶ年に二

牛馬を呑む
秘傳

千○百○六○十○人○の○配○膳○積○り○て○は○斯○の○如○し○家○業○は○一○日○も○油○斷○の○な○ら○ぬ○も○の○な
り○維○摩○居○士○が○方○丈○の○室○の○饗○も○右○の○術○を○云○ふ○な○る○べ○し
是○れ○畢○竟○累○積○の○秘○方○の○み○

◎牛馬を呑む放下の秘傳

牛馬を呑んと思ふには生にては吞がたし爲粉て吞にしくはなし其こな
しと云ふは外の事にはあらず牛馬を直段にかまわず賣て金銀にして酒
を活て吞むべし此術にて馬牛に限らず見世も店も田島ものみ盡す事妙
なり何事も種のなき放下はならず魔法つかひが徳利の中へ這入も同じ
術としるべし

作者は今日に於て、國を呑む怪物あるを知らずや。

◎薪いらすに物をはやく煮る秘傳

薪は毎日へるものなり鍋はへらぬものなり一日に一錢づゝの薪の損は

薪を煮る
秘傳

一○年○三○百○六○十○錢○上○鍋○を○求○る○直○段○な○り○隨○分○と○よ○わ○き○う○す○き○鍋○を○求○て○毎○日
な○べ○す○み○を○磨○く○べ○し○物○の○早○く○煮○る○事○妙○な○り
主婦坐右の銘に充つ可し

◎白髪を忽黒くする大妙藥

白○髪○を○黒○く○す○る○に○は○墨○を○こ○く○す○り○て○ぬ○る○べ○し○是○齊○藤○別○當○實○盛○が○秘○傳○な
り○其○外○に○胡○麻○を○用○る○方○も○あ○り○神○農○本○經○に○も○白○髪○黒○き○に○變○じ○年○を○延○て○不
老○と○い○へ○る○藥○多○け○れ○と○用○て○見○て○は○さ○か○ず○扱○は○神○農○の○う○そ○と○思○ふ○は○誤○り
即○商○人○の○か○け○ね○賣○藥○の○能○書○と○見○て○ち○が○ひ○な○し
何○事○も○能○書○の○世○の○中○な○る○か○な

◎吠犬をなだむる妙術

何○成○り○と○も○食○物○を○あ○た○へ○て○よ○し○た○ち○ま○ち○尾○を○ふ○り○て○な○き○や○む○事○妙○な○り
殊○に○む○す○び○飯○を○こ○ろ○ば○し○あ○た○へ○た○る○は○猶○よ○し○古○人○の○い○は○く○怨○に○報○る○に

白髪を
黒くする
秘傳

吠犬を
なだむる
秘傳

徳を以す犬のよふな根性の人も世にはあるなれば心得有べき事にや
小題大做

太宰春臺の書簡

左に掲ぐるは、大宰春臺が、湯淺常山に與ふるの書簡也。常山は『常山紀談』の編纂者にして、彼が其の原稿を、春臺に示し、其の意見を徴したるに答へたるものと思はる。予今夏備中倉敷に遊び、此の書簡を見る、字體行草を雜へ、其の大きさ概して四號乃至二號の活字にして、頭より尾に至る迄、毫も放漫の痕なく、實に矜嚴自から持したる春臺其人を想見するに足るものなくんばあらず。

予は『常山紀談』の愛讀者也。予の眼中に於ては、此の元龜天正の武將の言行録は、宛もプロタルクの希臘羅馬の英雄傳を讀むが如く映する也。蓋し吾人をして、我が祖先の雄魂英魄に觸著せしむるもの、偏へに此書の賜と謂ふ可き也。而して此の書簡は、此書の編纂に關

する意見と批評とを叙したるものにして、其事既に吾人の興味を惹く淺からず。況んや書中の説く所、十中の八九は、肯綮に中り、單に當時の受信者のみならず、又た後世の文人の頂門の一針たるものあるに於てをや。

此の書簡は、大原孫三郎君の所藏にして、今ま同君の好意によりて、之を讀者に頒つは、予が讀者と與に、同君に感謝す可き所なりとす。常山叢談涉獵一遍卒業申候能御集被成近世の新序説苑とも可申候後生輩讀得候は、誠^に其益不少珍重可仕事に候一覽の上所存も有之候は、可申進由先立被仰越候間一二愚意書付懸御目候不朽にも可被成思召候は、再思御改正可被成候。

一御自序面白く御座候但常山の字其説序文中に見え不申後の讀者惑可申歟同くは常山の字を冠らせられ候所以序中に御著し可成候。

一貴姓名淺の字を御去被成候事學者中の詩文などには複姓を一字二字省候て單姓に書付候事唐めき候て面白く候故世間にて仕事に候此書は世上俗人に御見せ可被成物に候間やはり日本俗間の通例に湯淺某と可成候は、可然候「春臺、護園の李王古文派の園裡にあり、其の所見此の如し、是れ彼が一頭地を抽ずる所以也」湯井湯川など申氏族も有之候間不知人取まきはし可申歟只有體に實を御書被成候様如何可有御座歟拙者は凡詩文著述にも氏族を唐めかし候事好不申候。一此書一部の文體始終一様に有たき物に御座候或處は軍記或處は歌書の様或處は經書の辭種々雜り候て見え申候平家物語は高く御座候盛衰記次之保元平治軍物語義經記曾我物語は體格降り候得共當時の人の作と見え申候太平記は又一等降り候へども是も當世の文にて御座候此體格の不同は文詞にて見え申候徠翁會如此被申候當時の俗文つたなくお

ろかなる様に見え候事も有之候へども却て是にて當時の人の著述と申事見え申候「著眼不凡」此度の御選述二箇年來の事にて候間其時世の詞を御用被成候は、可然候扱全部一體に御調被成候事劉尙新序説苑の様に有たく御座候

一經書學問の詞を必御除被成可然候

一儒學の文字名目を少も御ましへ被成候は、俗人讀兼ね解し兼可申候左候ては御書廢し候端にて可有御座候只世俗時人の詞にて御記可然候一歌學の詞も不入御事と存候只軍記家の詞計可然候

一當時有智有識の士議論理窟を申候處只今の文學の士殊に吾黨の士の詞を以て造語被成候事不入物に御座候其比の學問と申は五山禪僧計にて御座候それを學問候人只其所聞にて理窟を申候今川了俊などの如き御覽可被成候中々經傳史子などの詞は不存候會我物語に文選の詞を稱

し候など随分にて御座候只今の御選述に付只今の御心只今の御學問にて後より御取繕候ては實錄にあらす候人も信じ兼申候「實に然り」左氏傳は當時の實錄無疑公毅は後人の説と申事分明に御座候とかく只其時の人に相應いたす様有たき物に御座候

一諸侯は大名夫人は北の方後援は後攻陣營は陣所とも陣と計も援兵は加勢軍夫は使と計申たき物に御座候軍使と申事和漢古今に無之事に御座候鳥銃も只鐵砲となりとも被成間敷哉其故ははおりわさざしなど俗の名目とても除かれ不申和殿は御邊とも可被成か

一東照宮をば大御所とも可然歟其餘歷朝の君は只某院殿と被成可然候室町公方家にて鹿苑院殿慈照院殿と申格却て面白く御座候

殿下は向て申時の稱呼に御座候

東照宮は處によりて徳川殿とも可然候

一 小瀬甫庵太閤記を著候事拙者先父常に申聞候は加州金澤に町醫にて
小瀬甫庵と申者居住仕候大納言利家の家臣横山山城守長知と申者の所
へ心安く出入仕毎夜とき致候其時長知は尾州人にて織田家の事を覺申
故信長の事を甫庵毎夜尋問且太閤の事をも尋問候に長知或は委く或は
おろく語聞かせ候を甫庵退て書記信長記太閤記二部の書を著し世上
へ出し申候時長知是を聞信長太閤の事を左様に書記可申と存候而尋問
候は益々申聞様に有之候又遺漏も有之殘念に候其事を聊も知らせず
候故只一座の咄に申聞候を其儘に書付候は殘念の事に候甫庵馬鹿者に
て候と申候由長知大剛の士にて候故人の武勇をさのみ目に拘不申大方
の事をば稱美も不致只武士の有べき事と常に心得居申故甫庵に語候處
遺漏も多候由申候拙者先父は寛永十三年に生れ八十八歳迄存命仕候長
知をば覺不申と申候へ共長知後妻拙者家祖母と兄弟拙者第一伯父平手

忠右衛門と申者には長知季の女子くれ申候長知に久く近侍仕たる古き
士共數多有之先父弱年の時右の事語り聞せ候と申候甫庵は本國何方の
人と申事は不申聞候長知方に出入長知目を懸け候に平生咄の相手仕候
由長知は叡山に寄寓諸國武者修行仕後に前田利家に仕大膳と申候加州
大聖寺小松越中末守など多くの軍に武功有之一萬五千石迄に成其後同
列太田但馬守と申者を殿中にて放打に被申付太田祿一萬五千石を長知
に合せ給はり三萬石に成其後又加祿與力高等都合三萬五千石に成申候
猷廟の時同列本多安房守次子長知次子と兩人江戸へ被召出五千石つゝ
被下寄合にて奉朝請候長知次子は土佐守と申其子孫近年横山左門と申
候て大阪御船手勤申候土佐守弟内記清知と申者土佐守後を繼申候拙者
先父には從母兄にて拙者十歳許の比迄存命仕候如此の由緒故長知事は
先父種々の事覺居申候て拙者に語聞せ申候然は小瀬甫庵事黒田長政に

相見候事も可有御座候何れにもク様の事は傳聞の異も有之物に御座候よしなき長物語に御座候へ共好事の御心故序に申進候

一竹中半兵衛軍物語の時其子小用に立候て後にしかられ候と申事先年古河侯忠良御咄被成候佐久間將監と被仰候將監が子軍物語に聞はれ小便のもれ候をも不覺と世人にはれ候て可爲大慶にと被申候と古河侯被仰候是も傳聞の異にて可有御座候

一南郭事實をたかへず有體に御記候様にと申候由被仰聞候此言至極と存候足下御學術少邪魔に成候て御選述の文詞俗人に遠く御座候婦女迄も解し易き様に随分ひらく御記被成候様に仕度候學術の爲に仕候書はかな書にても文字を正し候て次でに少づも文字を會得仕候様仕候が好候と存候此度の御書物は只俗士婦女迄得心仕候様に御心付可然奉存候〔學術煩を爲すもの、今人亦少しとせず〕

一篇首に御姓名御記被成候處に備前國となりとも貴郷を御書付可被成義に御座候拙者存念は新兵衛と申御俗名をも書付申度存候是世俗にむき申事に御座候

一文章は時世に因て出來申候丘明史遷を明朝に出し候ても左傳史記を作候事なるまじきと元美申候是は其人其事古時に不及地名官名凡百の制度古に異なる故にて御座候此方にも信濃前司行長を今の世に出し候ても平家物語は出來不申候太平記にも成申まじく候元美左選短長を作候は此意にて御座候文人諸の擬作は皆此意にて御座候然ば今時の事をば只今時の詞にて同じ中に鄙しからぬ様に致候事文人の伎倆にて御座候此處御勘辨可被成候不盡

正月

元祥足下

純

拜

文士の文を作る、文を以て戯とするにあらずして、文を以て世を経
し、民を濟はんとする也。其の目的既に此に存す、唯だ自個の主張
を、最も有効に貫徹するの、文體文字を使用す可きのみ。春臺の意
蓋し此に外ならず。若し夫れ彼が友人の意見に答ふる、媿々此の如
し、是れ豈に朋友切磋の誼に於て、甚だ忠實なるものにあらずや。
賴襄曰く『前輩文章固細論』と、豈に管た文章のみならんや。

賴襄の書簡

予賴山陽の書簡を蒐集する、玆に年あり。今夏偶ま備中倉敷に遊び、
長尾村の小野節氏に邂逅し、氏の所藏に係る數十通を瞥讀するを得
たり。蓋し氏は招月亭主人小野泉藏翁の後にして、翁は單に賴襄に
向て、詩文の益を請ふたるのみならず。其の交誼尋常ならずして、
恰も賴家に對して、兵糧方の役目を勤めたるものに似たり。當時文
人の生計、頗る容易ならず。況んや傲睨自尊、膝を王侯の門に屈せ
ざる賴襄の如きに於ては、特に其の必迫を感じたるなる可し。此時
に於て素封家の讀書子あり、此れが供給の任に膺る。孤寒資少なき
賴襄に於ては、固より百萬の援兵を得たる心地したるなる可し。左
に掲ぐるは、節氏が殊に予の請に應じて、寫送したるもの、而して

其の挿註は、氏が書中の意義を分明ならしめん爲め、添加したるもの。予は實に其の用意の周到なるを喜び、獨り私するに忍びず、之を併録するととなしぬ。

尚々貴稿前々封し上候處暮庵（藤井暮庵名公顯字土晦備後神邊の人中年出て京都に住せり）ハダカておこせ此方にも見て樂むと申事にて任其意候左様御承知可被下候

契潤亦甚候小生も兩替町と申へ移居仕前後蝸冗何方へも無音仕候此頃少々得閑候て筆や硯を取出候首及於此貴稿いつも眞情眞景吾輩語にて拜見仕候を樂と仕候隨筆は追々御書可被成候小生なども警省仕候事多得益候絡繹拜見仕度候○今度移候處は洛中第一のしたらく町にてしたらくものには相應仕候多隙地此節は日々携鴉嘴鋤荒栽樹花鏡一部不離几案候舊寓（舊寓とは木屋町）景よすぎ候て飽申候其上いつもく

洛中第一のしたらく町

河原に日のあたりたるを看詰居候て眼精あしくなり精神も散越仕候夏は炎沙の氣難堪涼しければ川風逼膚病羸には大にあしく覺申候東山鴨水には別れあしかりしされども此度の讀書樓前樹竹陰翳四時花開在城如在野も頗娛心候此節茉莉盆栽每浴後花開清香滿軒夏のものに御座候御所置御座候哉（所置は所持のことなるべし）昔は高さものなりし今は甚廉に候テト御上洛ありたきものに御座候令姪爲何狀宜敷被仰傳可被下候舊稿三冊未濟近便上可申候聲律答（聲律答は遺稿にある答小野泉藏論詩律書なり）春初に出來居候處雖遲不妨と申御傳語にてよき御意とずるけ申候是も不遠上可申候倉敷之事（倉敷の事云は藤井機園に對する潤筆料督促の件なるべし）令姪と御計可被下候移居にて別して入用に候機園氣色あしくせぬ様仕度小生より直にも可申遣候と存候也

襄 頓 首

招 月 亭 主 翁

(此書年月日を記せずされども文中に兩替町移居の事を記せると茉莉盆栽之事を記せるとによりて文政四年の夏五六月の書なるを知るべし)

尊稿拜閱了候所此鄙稿懸御目度今日相認候處へ藤井より取に參薄暮勿々例の露封にて藤井へ託申候(例の露封といふは前書の所謂「暮庵ハダカておこせ此方にも見て樂む」といへりしよりの例なるべし)令姪及び藤彦七郎子へも御傳觀可被下候彦七郎子より先年の潤筆金千疋此間御取集被下扱御面倒の事ともに御座候禮を申遣候へ共猶よろしく被仰可被下候尤瓢の事申遣候へ共是は參不申候是は相樂居申候處失望候故五瓢庵記と申もの薄々相頼申來候事御座候故瓢を被下候は此記早速認可申と此間申遣候猶貴家叔姪様よりも其様に御催促可被下候尤五瓢の裡にてはなし員外の粗瓢粗はアチラでは粗也私方にあれば屹度佳品也右私見て置たる容酒一升餘のにて御座候ゆへにケ様に慾心申上候其段御含紅葉見に間に合様御越被下候様御口

五瓢庵記

添奉願候私方五合入あれどもチト足兼候時あり因此大にはしく御座候右御頼申度草々頓首

十月十一日

襄

泉 藏 老 丈

猶々令姪貴稿二冊先便墓(墓は本太郎務の父機翁方の墓なり墓碣銘遺稿に出づ)正面書改候節一所に上候様に覺申候舊稿は皆々其以前に皆濟に及候と覺申候是は無相違候其後の分はウロ覺也御落手の段可被仰下候不安心候也

頼 徳 太 郎

小 野 泉 藏 様

小 野 本 太 郎 様

(文政四年十月の書なり)

尚々近作七律少々録上是又一杯之肴に可被成候此風茶山翁杯の未作
ところなりチト御やり可被成や皆眼前實事也非別求奇江戸人など
の詩は別求新奇ていつも陳腐になり候

本文の瓢は日々穿眼相待居候様に被仰遣可被下候楓の手には合不申
候へ共是より雪見梅などに必用に候寒を防候には五合にては更に不
足に候

寒くなり申候如何御暮被成候哉先頃は嚴島詣被成候よし寒き頃よく思

召立被成候(招川老人即泉藏か風牀上人とともに殿)それ程の興御座候いしや廣

島よりも御立寄被下候よし喜び申越候老兄醉語犯風牀和尚ましめにて

迷惑候状甚おもしろき事なりしと申越候(風牀上人名は教存備中倉敷觀
龍寺の住職にして詩人なり)風牀

御連とはツマリ肴と可申候上京之節は僕甚不わしらひ嘸々わしく可申

候御歸家軟脚酷にて怡顔亦一適と存候御作とも拜見仕度候士晦も歸省

御立寄申候哉近況御聞可被下と存候(士晦は備後神邊の人にて後京都に住せし藤
井暮菴の事なり暮菴名を公顯といふ士晦は
其字なり)先頃詩律之答御細閱被下候哉其潤筆早速被遣寒士境界御察被下候
段扱々忝奉存候其落手の事は申上候と存候其節歎御叔姪に向て築園十
五絶上候御慰に相成候哉其後杳然如何と存候(山陽詩鈔(辛巳)に移居築園雜詠
十二首あり即此十五首中より選
出せし
もの)

扱御口添にてくらしきの潤筆も乍不足參大に忝奉存候それに付瓢をも
らひ申度と度と申遣御座候是も久しき約也彼秘藏の四瓢の外に不必愛
惜の一瓢私滞備中稔知仕居候ものなり一升程入る頗古にて竹の口がし
てありしやスワリもよかりしと覺申候(思軒氏の歸展餘事中に收録せられたる林
すれば當時山陽翁が如何に彼
瓢に垂涎せしかを見るべし)私方一瓢自九州得來的あれ其所容不_レ過_二五
合_一花や楓に留連する時はチト足くるしく候故_二願_一彼彦七兄之員外
瓢_一候事に候倉敷へも直に申遣御承知の由は平右衛門より早速申來候

のみにて彦七兄より闐然に候楓の間に合様に奉冀と申遣候へども音沙汰なし如何被下候はゞ五瓢庵記書て可上と申進候へども入用になき歟無御答候何卒是又御口添にて埒明候様奉願候(彦七は即ち藤井機園にて通稱は彦七郎名は承基)此近詩二首彦七兄へ遣度候シンに候は濃善詩女子之詩也(善詩女子云ふまても無く江馬細香なる)皆と侑一杯ために老兄より御轉觀被下候様に致候(致候もとのまゝ也べし)致度候の度を落し

いものならん

何ぞ其なる多忙

何分よろしく奉希候日は短し朝寝はする夜は酒を飲ねばならず何をする間も無御座今日も纔作此書已夕陽矣草々申留候以上

十一月廿四日

襄

泉

藏様

本 太 郎様

衣白山人百念灰。常年風味記芋魁。一生不試平章手。仍向寒爐

剝幾枚。

茶山翁書來索芋因餉一藍戲賦此爲副

山陽外史

寄暮庵戒裏之書

令叔姪並惠書及金子一々照收乍例厚意忝奉存候此方よりも發一書候行違に相成候哉と奉存候令姪より被仰下候事其節委曲御答仕候今日便宜暮庵兄より爲知來窮日之力看了薄暮勿々附數字去近々細書可呈候饒使不呈詩卷中親縷仕候御覽可被下候御作毎々實際感吟別而遊藝諸作郷扮在目足慰曠瞻一候

寄暮庵戒裏之書は御懇切千萬銘肝何卒淨書御越可被下候(泉藏の設稿中に寄藤井十晦書あり)

寄暮庵戒裏之書は御懇切千萬銘肝何卒淨書御越可被下候(竹口を施したる眞瓢は彦七贈僕の即兄携往藝的に候や御しらせ可被下候)

瓢は彦七贈僕の即兄携往藝的に候や御しらせ可被下候(外瓢を慥し藤井彦)

七郎は已を得ずして竟に他の一瓢を山陽翁に贈りて其責を塞きし者と思はる。彦七兄より申來候事も近々存居候煩一聲餘不一々

閏廿一日追暮

襄

拜

泉

藏様

本

太

郎様

拙齋先生遺稿

尚々拙齋先生遺稿 (拙齋西山先生詩鈔三冊刊本あり先生の門人たる泉藏及中原貞翁の評正を受) 此節最中拮据無遺憾一程に可致と存居申候大概當月中に卒業可仕候不願憚たよくなり候様にとのみ碎心申候事に候是襄爲ニ父執ニ効力に候されども菅子行(菅野景知字子行稱岱立)は播磨龍が其師の詩鈔を頼翁に託して評騰を受けんとせし事に付(野の人にて拙齋門下の高足たり菅て泉藏) 杯不承知なればム骨折に候如何タトヒ菅翁再閱被致候とも恐不如此襄之懇到と奉存候也萬々暮庵よりも可申上候され共暮庵とも未詳議此事猶近日逢申

候而委曲可申談候

(此書文政四五年の者たる事は文中の紀事にて知らるべきが閏月のあるは五年の二月なれば斷じて文政五年閏二月廿一日の書なりさだめ得べし)

酒瓢に就て

書中の酒瓢に就ては、民友社より出版したる、故森田思軒氏の『頼山陽及其時代』の三百五十七頁——三百六十頁を参照す可し。予も亦た倉敷に於て、之を見るを得たり。今現に林源十郎氏の藏する所たり。其の形状宛も頼翁書中記する所の如し。因に云ふ思軒氏は、山陽の藤井機園に與へたる書中に、五瓢庵記云々とありて、又た四瓢云々の字あるを見て、恐らくは五瓢の誤りならんと、疑を存したれども、實際四瓢にして、それに主人の腹量を加へて、此に五瓢庵は出で來りたるなりと、小野節氏は、語りたりき。予は此に筆を擱するに際し、坐ろに故思軒氏を追想し、懷に禁へざらんとする也。

故人を追想す

王陽明の詩

其の詩を誦して、其人を知る、易きに似て、實は難し。何となれば、詩亦た一種の技藝にして、技藝は客觀的に修得す可く、技藝即ち其人たりと速斷する能はざるものあれば也。元遺山曰はすや、

心書心聲總失眞。文章寧復見爲人。高情千古閑居賦。爭信安仁拜路塵。

と。是れ激語たるに似たれども、亦た幾分の眞理なきにあらず。世には輕躁にして世利に趨り、權豪の車馬の塵を望んで拜跪する、潘岳の如き輩にして、亦た時に高調を雲霄に歌ふの詩人なしと限られず。遮莫王陽明先生の如きは、詩即ち其の人物、詩即ち其の品性と云ふ可き一人たらん歟。吾人は彼が傳習録によりて、所謂陽明の學説を知

其の詩即ち人物の品性

るを得可きが如く、彼の詩によりて、如何に彼が品性の勢力を有したりしかを窺ひ知るを得る也。傳習録は王陽明を解剖的に描したるもの也。然も其の詩は、陽明の自から描きたる肖像也。其の高潔透明なる人格。其の隨處に人の嘆美崇拜を禁する能はざらしめたる磁石的性情、幾んど之れによりて、其の髣髴を得可きが如く思はる。

赴瀟次北新關喜見諸弟
扁舟風雨泊江關。兄弟相看夢寐間。已分天涯成死別。寧知意外得生還。投荒自識君恩遠。多病心便吏事閒。携汝耕樵應有日。好移茅屋傍雲山。

是れ彼が官宦劉瑾に忤ひ、貴州龍場驛丞に竄逐せらるゝ途中の作にして、友愛の情、殆んど行間に横溢せずんばあらず。韓文公が潮州に貶せられたる詩に比すれば、更らに眞摯人を動かすを覺ゆ。

泛海
險夷原不滯胸中。何異浮雲過太空。夜靜海濤三萬里。月明飛錫下天風。

彼は一たび海島に隠れんと欲し、閩海に泛し、颶風に遭ひ、漸く一生を得て、再び思ひ返へすことあり。愈々謫所に赴く可く決心し、踵を回らして、間道武夷を経。父を故郷に省せんと欲したる當時の作なりと云ふ。其の胸中の光明、天風海濤と相映じて、更らに一段の彩輝を帯ぶ。

彼が謫所に於ける境遇は、何人も殆んど想像に餘る程の困厄にてありき。吾人は今茲に其の長文たるを厭はず、引用せずして、止む能はざるものあり。

瘞旅文

維正德四年秋月三日。有吏目云自京來者。不知其名氏。攜一子一僕。將之任。過龍場。投宿士苗家。予從籬落間望見之。陰雨昏黑。欲就問訊。北來事不果。明早遣人覘之。已行矣。薄午有人自蜈蚣坡來云。一老人死坡下。傍兩人哭之哀。予曰。此必吏目死矣。傷哉。薄暮復有人來云。坡下死者二人。傍一人坐哭。詢其狀。則其子又死矣。明日復有人來云。見坡下積尸三焉。則其僕又死矣。嗚呼傷哉。念其暴骨無主。將二童子。持番鋤。往瘞之。二童子有難色。然予曰。嘻。吾與爾猶彼也。二童闕然涕下。請往。就其傍山麓。爲三坎。埋之。又以隻雞飯三盂。嗟吁涕涕而告之曰。嗚呼傷哉。渠何人。渠何人。吾龍場驛丞餘姚王守仁也。吾與爾皆中土之產。吾不知爾郡邑。爾烏乎來。爲茲山之鬼乎。古者重去其鄉。遊宦不踰千里。吾以竄逐而來此。宜也。爾亦何辜乎。聞爾官吏目耳。俸不能五斗。爾率

妻子躬耕。可有也。胡爲乎以五斗。而易爾七尺之驅。又不足而益。以爾子與僕乎。嗚呼傷哉。爾誠戀茲五斗而來。則宜欣然就道。胡爲乎。吾昨望見爾容。蹙然。蓋不勝其憂者。夫衝冒霧露。扳扳。壁。行萬峯之頂。饑渴勞頓。筋骨疲憊。而又瘴癘侵其外。憂鬱攻其。中。其能以無死乎。吾固知爾之必死。然不謂若其速。又不謂爾子爾僕亦遽然奄忽也。皆爾自取。謂之何哉。吾念爾三骨之無依。而來瘞耳。乃使吾有無窮之愴也。嗚呼傷哉。縱不爾瘞。幽壑之狐。成羣。陰壑之虺如車輪。亦必能葬爾於腹。不致久暴露爾。爾既已無知。然吾何能爲心乎。自吾去父母鄉國而來此三年矣。歷瘴毒。而苟能自全。以吾未嘗一日之戚戚也。今悲傷若此。是吾爲爾者重。而自爲者輕也。吾不宜復爲爾悲矣。吾爲爾歌。爾聽之。歌曰。連峰際天兮。飛鳥不通。遊子懷鄉兮。莫知西東。莫知西東兮。維

天則同。異域殊方兮。環海之中。達觀隨寓兮。莫必予宮魂兮。無悲以恫。又歌以慰之曰。與爾皆鄉土之離兮。蠻之人言語不相知兮。性命不可期。吾苟死於茲兮。率爾子僕來從予兮。吾與爾遊以嬉兮。驂紫彪而乘文螭兮。登望故鄉。瞻歸兮。吾苟獲生歸兮。爾子爾僕。尙爾隨兮。道傍之冢累兮。多中土之流離兮。相與呼嘯而徘徊兮。餐風飲露無爾饑兮。朝友麋鹿。暮猿與栖兮。爾安爾居兮。無爲厲於茲墟兮。

是れ實に千古の至文にして、絶好の悼歌也。一讀すれば彼が同情の眞摯にして、血温なるを見る可く。再讀すれば其の自から安んじ、命に俟つ所あるを知る可し。其の己を推して人に及ぼすの心、油然此の如きものあり、天下の蒼生を兼濟するに於て、何かあらむ。若し夫れ彼が養嗣子に示す詩の如きは、實に家庭教育の要旨と謂ふ可

きに庶幾し。

示憲兒

幼兒曹聽教誨。勤讀書。要孝弟。學謙恭。循禮義。節飲食。戒遊
戲。母說謊。母貪利。母任情。母鬪氣。母責人。但自治。能下人
是有志。能容人。是大器。凡做人。在心地。心地好。是良士。心地惡。是凶
類。譬樹果。心是蒂。蒂若壞。果必墜。吾教汝。全在是。汝諦聽。勿輕棄。

一片の浮辭なく修飾なし、質實真率にして、宛も眼前慈父が其の愛兒
を誨ゆるの趣を活躍す。何人の家庭にも、之を以て其の子弟を誨へば、
必らず大なる過ちなけむ。詩以て志を言ふ、何んぞ必らずしも酒と云
ひ、美人と云ふて、而して詩の本義を得たりと謂はん哉。

本文の作者が、平生愛誦する一は、左に掲ぐるもの是れ也。

啾啾吟

平生愛誦の一

一片の浮辭なく終飾なし

啾啾吟

知者不惑仁不憂。君胡戚戚眉雙愁。信步行來皆坦道。憑天判下非
人謀。用之則行舍即休。此身浩蕩浮虛舟。丈夫落落掀天地。豈顧束縛
如窮囚。千金之珠彈。鳥雀掘土何煩用。蠲鏤君不見東家老翁防虎
患。虎夜入室銜其頭。西家兒童不識虎。執竿驅虎如驅牛。癡人
懲噎遂癡食。愚者畏溺先自投。人生逢命自灑落。憂讒避毀徒啾啾。

是れ豈に吾人處世の歌にあらずや、而して字々悉く彼が閱歷と、實踐
との上より獲來りたるものなるを思へば、特に其の香味の馨しきを覺
へずんばあらず。

陽明の一生

蓋し彼の一生は、迫害を以て、始終したりき。其の壯なるや、遷謫の
途中に於て、追踪者の爲めに害せられんとし、江に投じて溺れたりと
聲言して稍々免かれたり。風濤に遭ふて、閩界に漂著し、山寺に投じ
て、寺僧納れず、野廟に臥して、虎の爲めに害せられんとし。亦た幸

ひに免かれたりき。宸濠の反に際して、萬死に一生を得、而して其の宸濠を擒にするや、却て讒毀に遭ふ。若し夫れ晩年に於て、彼は歸養の志を遂げんと欲して允されず、終に行旅中に逝く。而して其の死するや、尙ほ讒者の舌を結ばしむる克はず。其の迫害は、彼の墳墓の中に迄、追ひ及せし也。然も彼は此れが爲めに、其の樂を改めず、是れ彼が彼たる所以にあらずや。彼は哀傷自から禁せず、爲めに壽命を縮めたる柳子厚を學ばず。さりて亦た曠達縱放、此遊奇絶冠平生の瘖我慢を爲す蘇東坡に擬せず。向上の精神、明道の希望、泉の湧くが如く、憂患の身に迫るを顧みるに違あらざりしもの、寔に一代の高人たるに愧ぢずと謂ふ可し。

若し支那の歴史中に於て、彼に對匹す可き人物を求めば、恐らくは諸葛孔明あらんのみ。彼の集中には、幾度か孔明に説著したるが如し。

例せば、

龍興謾興

臥龍一去忘消息。千古龍興漫有名。草屋何人方管樂。桑間無耳聽成英。江沙漠々遺雲鳥。草木蕭々動甲兵。好共鹿門龐處士。相期採藥入青冥。

と、亦た以て其の心契する所を見る可し。

邵康節の如き、陳白沙の如き、道學中の大家は、多く儒冠して始終す。但だ陽明先生は然らず、其の一方に於ては、道を講じ、徒に教ゆると同時に、他方に於ては、憂時經國の念、須臾も息まず。其の武勳の如きは、有明一代を通じて、比類多からざりし也。能く言ひ能く行ふもの、獨り彼に於て、之を見る。

遊瑞華

萬○死○投○荒○不○擬○回○。生○還○且○復○荷○栽○培○。逢○時○已○負○三○年○學○。治○劇○兼○非○
百○里○才○。身○可○益○民○寧○論○屈○。志○存○經○國○未○全○灰○。正○愁○不○是○中○流○砥○
千○尺○狂○瀾○豈○易○摧○。

と、亦た以て其の抱負の一斑を知るに足る。

曾國藩曰く、陽明の文、光明俊偉の氣象あり、辭旨甚だ淵雅ならずと雖も、其の軒爽洞達、事を曉る人と語るが如し、表裏粲然、中邊俱に徹すと。知言と云ふ可し。詩に於ても亦た此の如し。蓋し其天品極めて崇高にして、絶聰秀明。固より學んで至る可きにあらず、加ふるに學問と功夫とを以てす。彼や初は任俠に溺れ、次に騎射に溺れ、更らに詞章に溺れ、神仙に溺れ、佛氏に溺れ、而して遂ひに聖學に歸し、良知派の開山となる。不幸五十七にして逝く、若し彼をして更らに二十年を加へしめば、其の造詣する所、更らに大なるものありしならむ。

彼が如何に夙慧なりし乎。其の十一歳の童時、金山を過ぎ詩を作りて曰く、

金○山○一○點○大○如○拳○。打○破○維○揚○水○底○天○。醉○倚○妙○高○臺○上○月○。玉○簫○吹○徹○洞○龍○
眠○。

又た蔽月山房の詩を賦して曰く、

山○近○月○遠○覺○月○小○。便○道○此○山○大○於○月○。若○人○有○眼○大○如○天○。還○見○山○小○月○
更○濶○。

謂を休めよ、小兒故らに大言すと。後年宸濠を擒にするの英畧も、陽明學派の開山たる高志も、此中に於て、其の約畧を領取す可きにあらずや。

若し夫れ彼の一生を通觀すれば、亦た是れ一篇の詩のみ。其の生るゝや、祖母岑氏神人緋玉を衣て雲中より鼓吹し來り、兒を授くと夢み。

其の死するや、雷雨大いに起りて、自然に墓域を撥く。中間彼が身世に觸著したるの不思議、枚擧に遑あらず、實に奇なりと謂ふ可き也。

別離の情

能因法師の歌

能因法師が『都をば霞どもに立ちしかど、秋風ぞ吹く白河の關』の如きは、當時に於ては、秀歌たりしなる可し。然も吾人の子孫が、此の妙趣を解釋するの難きは、阿非利加砂漠の土人が、氷の何物たるを解釋するより難かる可し。

時代の感情の發揮

古人の離別を重んずるは

人の感情は、時代によりて厚薄あるや否やは、暫らく心理學者の研究に譲り、少くとも其の感情を發揮する或物に就ては、時代によりて厚薄あるを見る也。換言すれば一の時代に於て、最も人を感激せしめたるもの、必らずしも他の時代に於て、さる勢力を有するものにあらず。古人は實に離別を重んじたりき。試みに支那の詩より離別の分子を抜き去らば、剩す所幾何ぞ。一部の唐詩選、留別、送別、懷人、望郷の

題目、實に其の重なる部分を占めつゝあり。然り離愁別恨は、實に詩思を喚起せしむる好個の詩神にあらずや、豈にたゞ陽關三疊の曲のみならんや。

陟_二彼_一帖_一兮。瞻_二望_一父_一兮。父曰嗟予子行_レ役。夙夜無_レ已。上慎旃哉。猶來無_レ止。

陟_二彼_一岵_一兮。瞻_二望_一母_一兮。母曰嗟予季行_レ役。夙夜無_レ寐。上慎旃哉。猶來無_レ棄。

陟_二彼_一岡_一兮。瞻_二望_一兄_一兮。兄曰嗟予弟行_レ役。夙夜必_レ偕。上慎旃哉。猶來無_レ死。

是れ周代支那人の父子兄弟の離別の情を叙したるもの。描き來りて千載新らたなるが如し。然も鞞一個にて、世界を股に掛くる今人に於ては、斯る詩情は、容易に湧き出づ可き望み少なし。

漢代に到り蘇武李陵の詩、何れも離愁別恨の結晶にして、一唱三嘆の妙あらざるなし。

良時不_二再至_一。離別在_二須臾_一。屏營衢路側。執_レ手野踟躕。仰視_二浮雲_一馳。奄忽互相踰。風波一生_レ所。各在天_一一隅。長當_二從_一此別。且復立斯須。欲_下因_二晨風_一發。送_レ子以_二賤軀_一。

是れ李陵が胡地に留まりて、十九年漢節を持したる友人蘇武が、本國に放還せられんとするに際し、與へたるものなりとして傳へらる。其の果して然るや否やは、必らずしも問ふを要せず。とても二十世紀の今日に於て、容易に斯る詩を見出す可き望み少なし。

若しそれ六朝の時代に於て、無名氏の送別詩

楊柳青青著_レ地垂。楊花漫漫攬_レ天飛。柳條折盡花飛盡。借問行人歸不_レ歸。

の如き、語淺くして情深し。

古人は曰く、『丈夫非無淚。不灑別離間』と。是れは反語として、解釋するを要す。それ別離の涙せきあへず、然も一片の意氣地にて、其の忍ぶ可らざるを忍ぶの熱情を傳へたるもの也。然も今日に於ては、夫婦の洋行に際して、手巾を濕す細君とては、百人に一人もなし。斯る世の中には、古人一吟双涙を流したる『西出陽關無故人』の詩の情趣さへ、玩味するもの少なし。況んや之を作るものに於てをや。汽船や、汽車や、電信や、郵便や、凡そ運輸交通機關の革命は、送別、留別、懷人、望郷の好題目をして、殆んど乾燥無味たらしめんとす。古に於ては、生別は、即ち死別たりし也。王陽明の『既分天涯爲死別。寧期意外得生還』の如き、實に當時の情況を活描したる也。それ博望侯張鷟の大宛に使用するや、往還十三年、行時百餘人、唯だ二人生還

を得たり。安倍仲麿の如きは、身は唐朝の榮官を博したれども、再び三笠山頭の月を眺めんと欲し、纜を明州に解きたれども、破船の爲めに魚腹に葬られんとし、終ひに唐朝に一生を終りぬ。支倉六左衛門の如き、伊達政宗の爲めに、羅馬に使ひし返るや、八年餘を経たり。行役の苦此の如し。如何なる鐵腸と雖も、別れに臨んで、尙ほ一滴の熱淚湧くを禁ずる能はざる也。是れ古代の別離を歌ひたる詩の、尙ほ其の清新なるを失はざる所以也。

張文昌の『送遠曲』に曰く、

戲馬臺南山簇々。山邊飲酒歌別曲。行人醉後起登車。席上廻樽勸
僮僕。青天漫々覆長路。遠遊無家安得住。願君到處自題名。他日
知君從此去。

の如きは、別段の奇警なる文句なきも、實に人をして情に勝へざらし

めんとす。此の如き好題目も、今人に於ては、容易に其の真に達す可き望み少なし。境遇同じからざれば也。古詩に曰く、『歩出城東門。遙望江南路。前日風雪中。故人從此去』と。一讀凄悲絶せんと欲す。是れ古人の友情今人よりも殷なるにあらず、古人は一たび別れて相見の期少く、今人は一たび別るゝも、相見の機會多ければ也。

杜子美が『家書抵萬金』の句は、亂離の際の故のみを以て、然るにあらず。昔人が音信を大切にしたりは、四錢の「萬國聯合郵便はがき」にて、世界の隅から隅迄達するを得る、今世の人の容易に想像し得る所にあらず。

赴北庭度隴思家

岑

參

西向輪臺萬里餘。也知鄉信日應疎。隴山鸚鵡能言語。爲報家人數寄書。

鸚鵡に依頼して、家人に數は書を寄せよと云ふ。情の痴なる所、却て真なるを見る。

客越夜得家書

高

啓

一按家書意便歡。外封先已見平安。故鄉千里書難得。不敢燈前匆匆看。

京師得家書

袁

凱

江水三千里。家書十五行。行々無別語。只道早還鄉。

如何に家書を珍重したるよ、如何なる事が、家書中の重なる要件なるよ。倫敦と東京の郵書が二十五六日にて達し、電報が半日程にて達するの今時に於ては、如何に戀人より得たる書翰とて、左程重寶とす可きにあらず。吾人は一別再び相見ずして終るとある可し。然れども今時に於ては、若し相見んと欲せば、容易に相見を得可きを以て、

此の希望の爲めに、假令相別るゝも、亦た多く情感を惹起するに及ばざるものあり。

人情に古今なし、されど其の情感の動く所は、時代によりて同じからず。古人には古人の題目あり、今人には今人の題目あり。只だ一心を師とす可く、古人を師とす可らず。苟も直ちに胸臆に湧く情感を、その儘に寫す。縦令剪裁の巧を缺くも、尙ほ真情流露、活氣淋漓たるを失はざる可き也。眞詩は眞情より來る、摸倣にあらず、矯飾にあらず。

天才と勉強

天才

勉強は、天才に缺ぐ可らざる、一の伴侶也。假令勉強即ち天才と悉く謂ふ能はざるも、天才是れ勉強と謂ひ得る場合頗る多し。

賴子成曰く、予を才子と云ふ、未だ盡さず、勉強家と云ふ、始めて可なりと。此の言は多くの天才に適用するを得るなり。

近観世左

頃ろ武將感狀記を讀むに、觀世左近、謠の三病を論する一節あり。

觀世左近は謠に名を得たる者なり。後剃髮して、安休と號す。謠に三病あり、聲のよきと、覺へのつよきと、拍子のきゝたると、此の三事備れる者、多分謠に成らずして止むと、人に教へぬ。是れ何の道にも、ある事なり。器用を頼む者は、自から満たりとす、自ら満たりとする者は、工夫を積まず。工夫を積まざる者は、諸藝の奥意

謠に三病あり

を曉り難し。

如何にも意味ある話ならずや。

狩野家に於て、探幽が元信以外——若し以上といふ能はずんば——の
大手筆たるとは、世に異論なき也。而して探幽の技と、探幽の勉強と、
如何なる至密の關係ありたるかは、左に記する所によりて、其の一斑
を察す可し。

狩野家に傳來したる、歴代の摸圖、寫生等、凡そ長掉七個あり。中五
個は、單に探幽一人の手になりしもの、然も是れ探幽五十歳以後の作
にして、其の以前のもものは、悉皆焼失したりと云ふ。其の精根、其の
勉強、豈に尋常ならんや。善かなミカヘル、アンゼロの語、曰く些細
の事も、以て善美の功を完ふす可く、而して善美の功は、決して些細
の事にあらずと。

予は嘗てトルストイ翁が、新聞紙を手にならずと聞きぬ。然も翁がチユラ
州の村莊に赴き見れば、其の室内には、新聞の切抜通信、山積してあ
りき。翁の文章は、其の精神全幅に貫注して、決して功を一字一句の
間に争ふを欲せず。されば翁の文章を讀むものは、其の妙語なく、警
句なく、平々として奇なく、然も何となく或る勢力に支配せられたるが
如き感に打たれざるものなからむ。此に於てか人多くは、翁の文章や、
一氣呵成なる可しと思ふ。而して其の原稿を見れば、豈に料らんや、
殆んど一行として完全なるものなし。塗抹、改竄、再三、再四。其の
校正刷すら、普進人の原稿よりも添刪を加ふる多く、爲めに植字工を
泣かしむるに到るものありと云ふ。

天才はそれ勉強の伴侶なる乎。世には勉強家にして、天才たらざるも
の多からむ。然も尙ほ勉強相應に、樹立する所あるを妨げず。若し天

才ありて、勉強なくんば、天才も荒む可し。天才は企て及ぶ可らず、勉強は企て及ぶ可し。而して勉強にして、若し幸ひに天才の要素と抱合すれば、稀世の光輝を發射するは、必然の結果也。
予は粟粒の樗實が、山よりも高き喬木となるを見る毎に、發達の力の恐る可きを覺ゆ。天才はそれ此の如き乎。彼の秀で、遂ひに實らざるもの、是れ誰の過ぞや、嗚呼是れ誰の過ぞや。

ゲエテの格言

去年（三十三年）八月、北清事件の沸騰するや、偶々編輯案頭に於て、ゲエテの格言二三を抄譯し、聊か冷氷一片に代へたりき。今や春風は、八百八街に満ち、輪塵蹄埃の間、亦た幽懷高情の風雲に入るものなからず。此に於て重ねて耐久朋の一なるゲエテ格言集を披らき、試みに會心の句、數節を録し、同好の士に寄すと云爾。

◎知慧は眞理の中に存す。

法螺や、胡魔化は、一時を瞞過す可きも、決して久しきを持す可らず。吾人は唯だ眞理を探討せんとを努むるを要す。

◎寛大は何人よりも愛好せらる資質也、特に謙和の性情と伴侶たるに於ては。

桃李言はず、下自ら蹊を爲すものは是れ也。
 ◎水の有る所、必らずしも悉く蛙棲まず。然も蛙棲む所、未だ曾て水なくんばあらず。
 的に是れ妙喻。

◎批難に對して、争論するも、辯護するも無益のみ。唯だ之を意とせずして活動せよ。然る時には批難も漸次に叩頭し來らむ。

苟も艱險を蹈み來りたるものは、必らず此の訓言に就て、思ひ當るとあらむ。

◎予は誠意たるを約するも、公平たるを盟ふ能はず。

誠と不誠とは意識によりて辯別するを得るも、公平と不公平とは、然かする能はず。是れ誠意の人にして、動もすれば偏頗を免かれざる所以にあらずや。

◎世には一の過誤さへ爲さざるものあり。蓋し彼等は何事にても、爲す可き價值ある事を爲すを欲せざれば也。

それ一の成功なく、一の失敗なく、悠々寛々、要是れ醉生夢死の徒のみ。

◎人の過誤は、往々彼をして眞に愛す可き者たらしむるとあり。

過を見て仁を知るの類歟。

◎總て生活の道は、生存する爲めに生存するを、放擲するに包括せらる。

基督、釋迦、鎖拉底斯、孔夫子の教旨も、詮し來れば、之に外ならざる也。

參照 國民叢書『日曜講壇』『ゲエテの格言』

春窓雜筆

老人の跋扈

實力の伴はざる氣位

◎老人の跋扈を排斥す可しと説く者あり。然も是れ老人の跋扈と云はんよりも、少壯者の振はざるが爲めのみ。今日の少壯者は、氣位は頗る高し、但だ實力の伴はざるを奈何。實力の伴はざるは、職として其の素養の稀薄なるに由る。白晝には、壯言大語し、夜陰には妓酒微逐す。何の暇ありてか能く靜思せむ。何の餘裕ありてか能く讀書せむ。而して何の時間ありてか能く其の志を養ひ、其の識を長じ、其の膽を練らむや。

星巖の詩

◎梁星巖の詩に曰く、
虚衾推讓古來有。韓孟同朋能耐久。不怪眉山絕大才。一生低首拜黃九。

ミルトン
スパンセル

と。今日の所讀る學者先生の間に於て、果して一生首を低れて黃九を拜する的人幾許かある。

◎西學の到來してより、學海幾多の變遷を見る。一時天下を席捲したるミルトン、スパンセルの如き、今日に於ては、其の名字さへ説く者なし。然もミルトン、スパンセル豈に容易に輕ず可んや。特にミルトンの如き、其の人品の高雅溫渾にして、其の志趣の崇貴忠厚なる、殆んど聖徒に庶幾さきものあり。耳食の人、徒らに彼が利學の大家たるを知りて、其の胸底には、濟人の熱誠、恰も天火の如く燃へつゝ、あるを察せず。憾む可きのみ。

◎我國の學者先生の西哲の意見を紹介する、概ね其の皮相のみ、其の糟粕のみ。彼等が如何なる動機よりして、斯の如き意見を主張したる乎は、殆んど措いて問はざる也。其の意見を知らんと欲せば、其の意

西哲の意見の皮相

見の持主を知るを要す。人を以て言を廢せずと云ふも、其人を知れば、其言の一層深き趣旨を會得するに於て、必ず餘師あらむ。

◎今日英國の文學を説く之士、ゴス、センツベリ、ドーデン諸氏に私淑する者多し。是れ必らずしも不可ならず。されど彼等の手引きにて、英文學を辿るは、恰も林西仲、金聖嘆に案内せられて、支那文學を見るが如し。此れより以上の事は、決して望む可らざる也。二流、三流の批評家の眼孔を藉りて、而して英文學の壯觀、此に盡くと謂ふ。予は之を信する能はず。

◎英人の特性の重なる一は、宗教心にして、他の一は、自由を愛する精神也。英人は此の二個の動力に驅られて、革命すら辭せざりき。されば英文學の真相を解せんには、少くとも此の二大綱を提ぐるの必要あり。世に政治的卓識を有せず、宗教的靈眼を有せず。而して英文學

を高談する者あらば、そは恐らくは盲者の櫻花を語ると一般ならんのみ。而して世之を謹聽する者あるは何ぞや。

◎品質と分量とは、必らずしも反立せず、又た必らずしも並立せず。但だ多くの場合に於て、分量に重きを措けは、品質は下らざるを得ず、品質を嚴重に吟味すれば、分量は減せざるを得ざるのみ。而して其の孰れを採るかは、銘々の勝手たる可し。但だ今日は分量の世の中らしく思はれ、新聞にても、雜誌にても、其の雜駁にして多量なるを嗜好するの傾向あり。作者にても、美術家にても、諺に數でこなす的人多く用ゐらる。兩句三年一吟双涙の如き詩人は、今日に於て餓死せずんば、僥倖のみ。實に吾人の思ひ及ばぬ世の中かな。

◎偶々王荆公獨臥の小詩を想起す。

茅簷午影轉悠悠。門閉青苔水亂流。百轉黃鸝看不見。海棠

無○數○出○墻○頭○

恰も是れ一幅春晝閑居の活畫也。何人を倩ふて、此の好畫題を描かしむ可き。乃ち輪塵蹄埃の際にありと雖も、猶ほ青苔亂流の間にあるが如けむ。

午睡漫録

午睡漫録
代ゆに
録

王陽明の詩に曰く、人間白日醒猶睡。老子山中睡却醒。醒睡兩非還兩是。溪雲漠々水冷々。予や溪雲の漠々たるに親まず。水の冷々たるを見ず。炎天烈日の下、黄埃紅塵の裡、汗を揮ふて、編輯案頭に坐す。固より午睡を試みるの餘間なし。然も題して午睡漫録と云ふは、之を以て午睡に代ゆるのみ。

◎松月生夜涼。風泉滿清聽。是れ孟浩然の句。松際露微月。清光猶爲君。是れ常建の句。何處か月明可ならざらむ、何時か月佳ならざらむ。但れ月光松枝を透して涼影娑婆たる時、榻を庭上に移して露坐すれば、殊に愛す可きを覺ゆ。

◎マシウ、アルノルドの夏夜の詩に曰く。

マシウ
アルノ
ルドの
詩
235

常建の
句

静かなる月光は、我に向て恰も斯く語るものゝ如し。汝の平らかならぬ胸は、炎々として燃もせず、さりとて死するが如く静止もせず、全く煩惱にも支配せられず、さりとて世俗の威權に壓せられて麻痺するともなく。相ひ換らす行きつゝ戻りつゝ、泛々として動きつゝ、ある乎と。

而して予は如何に祈る可きやを知らず。依然たる故吾にてある可き乎、將た頭を低れて、滔々たる世人に伍す可き乎。

予は月光に對する毎に、往々此の詩に想著するを禁ずる能はず。其の何故たるを知らざる也。

◎惠磨遜の報償論は、哲人世に處して、自から慰安するの方便を説きたるのみ。少しく深く立ち入りて考れば、人心は報償論にては、満足し兼ねる也。

◎アルノルドの詩ミセリナスの如きは、此の深奥なる人生問題の煩悶に觸著したるもの乎。ミセリナスは、埃及の王也。父王は暴逆にして、人民を虐げつゝ、榮華を極めて、其の天年を全ふしたり。王や之に代り、正道を以て民を治め、民亦た悦服したり。然るに神明の託宣あり曰く、王の壽命は、六年を出でずと。此に於て彼は太息して曰く。

予の父は不仁を愛して、長壽を保ちぬ。

彼や威權赫々たる裡、白頭にして逝きぬ。

予や彼の蔑視したる正善を好みて、惡を惡めり。而して今や神明其の報酬を宣告したり。

予や長へに生き、高く民に臨まんと欲したりき。然るに見よ、六年の後は、予は死せざる可らざらんとは。見よ、予は死せんとは。

此に於て彼は天意を疑へり、天は果して惡に祉し善に禍ひする乎と。

彼は最早此の世に望みなしとなし、其の短日月をば、人生の歡樂を盡して逝かんと企てたりき。然も彼は自から内に省みて、其の心を點檢し、其の堅實なる精神を自覺し、此れによりて、日一日と靜寧に、高尚に、且慰安せられ、且つ把持せられ、遂に従容として死期を待てり。

◎要するにアルノルドの人生に對する見解は、此の如きのみ、人生終極の如何は、人得て知る可らざるも、人は其の知り得る限りに於て、高尚の生活を遂ぐ可き力を有し、且つ義務を有すと。約言すれば、假令人には來生なきも、此世をば、高く引き上げよと。

◎羅馬賢帝マルカス、オレリアス曰く、天然よ、萬物爾より來り、萬物爾に於て在り、萬物爾に復ると。是れ實に天然を言ひ盡したるもの歟。善かな言や。

◎然るにアルノルドは、左の如き意味にて語りぬ。

天然と同化せよと、誰れかざる無稽の言を爲す。知る可し、人は天然の有する總てを有するのみならず、更らにより多く有するを。其のより多く有する所に、人の正善の希望は存するものぞ。

天然は殘刻なり、されど人は血を流すを好まず。

天然は強情なり、されど人には涙あり。

天然の終る所、人の始めざる可らざる所也。

玩味し來れば、無限の深旨あるを覺ゆ。

◎頃ろ『常山紀談』を讀むに、其の一節に曰く。

山中の城を攻る時、木村常陸介師春が士、鳥井源八郎、先がけして城に付名乗り、羽柴藤五郎秀一が士磯野平三郎續き來り、汝は首取源八郎と、世に云はれたる譽の士なれども、田舎そだちなる故武功を辨へず。斯る場にては、人はあきれ氣後れする物なる故、爰に

て名乗れば、是に心附て、我先にと進むゆゑ、思ふ儘なる獨功名もならず。物の譯も知らず、名乗るまじき處にて名乗るなりと笑ひければ。鳥井聞て平三郎は、志の士と聞しに、眞の志士をばしらざるよ。人のあされたる時は、尙高聲に名乗て、人に心を付力を添て、多くの人を用に立つること、武士の義なれ。獨高名をせんとするは小事なり、いふに足らずと答へしかば、平三郎言ふ事なかりけり。

軍陣の際のみならず、總ての場合に於ける、面白き教訓にあらずや。公共心とは、此事是れ也。

◎北齋には富嶽百景の圖あり、隨處之を描取せば、千萬景も畫ならざる可し。予が最愛する富嶽の光景の一は、青山離宮の前よりの遠景是れ也。夕陽既に没し、暮色天地を包まんとす。乍ち富嶽の淡墨畫の如く、遙かに街道の當面、雲際に聳ゆるあり。見渡たす限り、髮の如き大道、

兩側の家に添ふて、電線の水平に連り、遠く富嶽に接するかと思ふばかりなり。車を驅りて青山方面に向ふ。身は家に歸るにあらずして、恰も無極に向て旅行するが如き、感なくんばあらず。擾々たる百萬の人家焉くにある、予は唯だ吾と天際の富嶽とのみ存在するを知るのみ。此の如き好景、却て馬蹄車塵の際に没し去り、更に人の顧みるものなさは何ぞや。

書窓獨語

成功の意義

○請ふ足下の所謂成功の意義を語れ。然らば足下の前途は、予敢て之を豫言するも、亦た憚かる所にあらず。蓋し或者は、成功とは、卒業して富家の婿となるにありと爲し。或者は、成功とは、高帽を被り、馬車に乗るにありと爲し。或者は、成功とは、議員となるにありと爲し。或者は成功とは、官吏となるにありと爲す。或は富家の翁たらんと欲し、或は國民の先導者たらんと欲す。何人が成功を愛せざらむ、但だ其の成功の本義に於て、各人各個の見解あるのみ。

不精病怠惰病

○四百四病の中に於て、最も厄介なるは、不精病なり、怠惰病なり。勉強を好まぬ者には、到底如何なる尺度も當つると叶はぬ也。米國大統領ルースヴェルト氏の語に、國家に於ても、個人に於ても、偉大に

學問の三大柱

赴くの道は、唯だ健闘と精勵とにありと云へり。平凡なる語なれども、此れ以上の眞理ある可しとも思はれず。○學問の三大柱、一に曰く多く觀察する事、二に曰く、多く精苦する事、三に曰く多く研習する事。是れ西哲が要訣として、吾人に授けたる所也。

古人を尙友せよ

○今人にて物足らぬ時は、古人を尙友せよ。伊藤大隈にて、物足らねば、南洲、松菊、甲東も在る也。海舟もあれば、東湖もあり、象山もあれば、小楠もあり。松陰もあれば、景岳もあり。更らに溯らば楯にて量る程ある也。

日本歴史

○日本國民に對して、若し愛想が盡きんとする場合あらば、日本國民の前途に就て、若し失望するが如き場合あらば、須らく日本の歴史に向て、其の救療を求めよ。一部の日本歴史、吾人をして如何に氣強

く、望厚からしむるよ。

◎織田信長は、天性鄙客の人也。焼栗一個さへ、他人に與ふるを愛みたりと云へり。然も其の天下に武を布くの猛志ありて、羈旅の臣、明智光秀の如きさへ、國持大名たらしめたりき。

◎豊太閤の潤達は、其の天性たり。彼は實に一生を樂ましめたり。行樂は、殆んど彼の一生を通じたる特色にして、彼に取りては、賤が岳の合戦も、朝鮮征伐も、聚樂の大宴會、醍醐の花見と、殆んど多く異なる所なかりしが如し。

◎彼は遊樂に於いて、最も多くの趣味を發揮したり。高野詣、芳野櫻狩等の新曲を作らしめて、自から舞ふたるが如きは、其の一端に過ぎず。醍醐の花見は、今日の所謂園遊會也。肥前名護屋に於ては、彼は實に假裝舞會を催したり。予は甫庵の太閤記に於て、其の確證を見

出だせり。

◎思へば思ふ程、徳川家康は、經世的大器の人たりしを知る。彼は言に訥にして、行に敏なるの人たりし也。極めて不器用の如くして、口より先きに手は動きたる也。大阪冬夏二陣の如きも、彼の老後に於ては、眞に苦痛なる悲劇にして。彼も決して自から好んで、此れを挑發せしにあらざる可く。さりとて大阪を此儘にしては、彼も瞑する能はざりしなる可く。即ち已むを得ずして、寡婦、孤兒の吭を扼するに至りしならむ。然も勝者の威を用ゆるに際して、如何に彼が寛大なりしかは、苟も史眼ある者の、看破するに、難しとせざる所ろたらずんばあらず。

◎信ずる所ある者は、決して急遽ならずと。知らず彼は何の信ずる所ありし乎。彼の晩年に於て、少しく平調を失したるが如きは、蓋し日

晩道遠きの念に、壓迫せられたるが爲め乎、否乎。

國民が自國の英雄を、閑却したる時は、是れ國民自暴の時也。

明治三十八年 五月十七日

記

者

驅暑小言

炎熱酷吏去。清風故人來。昨來の驟雨、殘暑を洗ひ去りて、殆んど驅暑の必要なからしめたり。記する所例によりて、脂肪氣多し、寧ろ改題して、迎暑小言と爲すの適當なるに若かず。

◎良妻とは、如何なる者を謂ふ乎。内助とは、如何なる事を稱する乎。善く戰ふ者は、勝つよりも負けぬ工夫を、先務と爲すと聞く。されば已れの助けとなる細君を吟味せんよりも、寧ろ邪魔にならぬ細君を撰擇する方、安全なる可き歟。就中政治家に於ては。

◎頃ろ逝きたるクリスピーは、伊太利の侏儒國中に於ては、先づ巨人の一に數ふ可き漢なりき。彼は伊太利には、餘りに巨大に過ぎたりとは、識者の評言なりとす。然も彼の後半生の事功を誤らしめたる者は、

良妻と如何なるもふの乎を謂

クリスピー

主として彼の妻の力に因る也。

◎一人の將軍あり、嘗てクリスピーの親友と與に、彼を其の家に訪ふ。既にして辭し歸るや、將軍憮然として曰く、クリスピーには、此の世に於て、一人の朋友なき乎。親友曰く妄言する勿れ、彼は幾千の友人を有するを知らずや。將軍慨然として曰く、否な、否な、若し一人にてもありたらんには、彼の婦人を活かして置く可き筈なきにぞ。蓋しクリスピーの政敵は、實に彼の妻にてありき。彼女が宮廷に於ける不評判は、遂に其の夫婦の不入望、不信用を誘起せしめたりき。

◎曹孟德は、劉玄徳に比すれば、餘程の快活男兒たりき。若し惡黨なりとせば、快活なる惡黨たりき。

太祖爲人佻易無威重。好音樂、倡優在側、常以日達夕。被服輕綺。身自佩小鞶囊。以盛手巾細物。時或冠帽以見賓客。每與人談

論戲弄言誦。盡無所隱。及歡悅大笑。至以頭沒杯案中。肴膳皆沾汗巾幘。其輕易如此。

此れ丈にては、曹孟德も、一個の蕩兒と擇ぶ所なき也。然も機警にして、權數に富み、雄決峻刻にして、人才を駕御するの妙用に到りては、更らに及ぶ可らざるものあり。乃ち彼が斯の如き蕩兒的行徑も、亦た期せずして、恐らく他人を操縱する方便となりしも、未だ知る可らざる也。

◎予は比公が獨逸建國に大功あるを思ふ毎に、未だ彼が維廉老帝（比公の所謂る老紳士）の知遇を得たるを幸とせずんばならず。一言すれば比公をして、其の手腕を揮はしめたるもの、一に老帝の力に據る。比公語りて曰く。

老帝は、萬事萬般、予が勝手に取扱はるゝものと、世間ではまゝ思

ふ者があるが、それ程事實に違ふたものはない。世に老帝程六ヶ敷人はないのである。彼は自個の意見や、慣例や、偏僻に、恐ろしく執着して居た。そこで彼に新らたなる仕事を持ち込むには、頗る骨が折れたのである。予は雑作もなく彼の裁可署名を得る積りで出掛け、失望して歸つたのが、幾度あるか知られぬ程であつた。又た幾度か長々敷謁見をなし、種々の分解を盡して、イザと云ふ場合に、彼は斯く云ふのである、お前の申す言が尤もの様である、朕も其の通りと承認するのである。併し、今ま一と考へ考へる可く、一兩日容赦して貰ひたい。朕も萬一輕忽に失せぬ様、篤斗注意をせねばならぬからにと。斯く迄容易く行かぬ代りに、彼は非常なる美質を持って居た。それは髮毛の未迄間違がないと云ふとである。一たび承引せられた時には、眞實に承引せられたのである。一たび其の案に裁可

を與られた時には、一分間も此れが實行を遲疑せられぬのである。それは如何なる外來の勢力でも之を揺かすとは出来ぬのである。彼は容易に決斷せぬ、併し一たび決すれば、彼の上に家が建てらるゝ程大丈夫なものである。彼が一代の間、予は未だ嘗て彼の爲めに、出し扱しに逢ふことがなかつた。此點に於ては、彼は眞個の武士である、大丈夫である。

維廉老帝の如きは、實に獲難き明主也、英主也、又た賢主也。

○伊太利先王ウンベルトの如き、暴民の訴る通り、獵位者のゆする通り、世の中の騒ぐ通り、其の風位に向て叩頭するを以て、立憲君主の本領と爲たるが如きは、如何に其の一個人としての動作には遺憾少きも、君主としては、實に國家を誤りたるものと謂はざるを得ざる也。

○伊太利建國の歴史を見れば、随分艱難ならざるにあらず。然も其の

大業の過半は、カヴァールの智術にて成就したるもの也。識者或は伊太利統一の業が、區々外交政策によりて成就したるが故に、國民の鍛錬未だ至らず、遂に中途にして沮廢せんとするの狀を呈するに到りたりと論ずる者あり。若し此論にして、半點の眞理あらしめば、吾人は、我が維新の大業に就ても、亦た斯く言ふ可き理由あらんとを恐れずんばあらず。即ち戊辰の際に餘りに廉價にて拂ひたる賠償は、明治三十年の後に於て、其の利足と共に拂はざる可らざる也。

◎情を叙し、景を描く、豈に多言語を要せんや。歐陽修の張職方に與ふるの書に曰く。

某啓。相聚逾年。別來豈勝思戀。道塗無阻。行已及陳。時々得雨。舟中不熱。自過界溝。地土卑薄。桑柘蕭條。始知穎真樂土。益令人眷々爾。小兒輩望見萬壽塔。尚指以爲臺頭。聞其語。不覺愴然爾。

過陳恐難附書。秋暑多愛。一讀以て文章の三昧を覺る可し。

人生に最も難きは、人と人と相得るの難きより難きはなし。

明治三十八年 五月二十三日

記

者

隨筆の隨筆

偶々睡氣醒ましに、案頭の雜書を披らき、讀むともなく、讀まぬともなく、其の會心の件を抄記す。讀者又た讀むともなく、讀まぬともなく、之を睡氣醒ましの清興に供して可也。

◎其の愚には及ぶ可らず

ある人文盲なるものを異見して、世の交りは他の事はいらす、唯堪忍の二字をよく守るべし、といへば、文盲の人は頭をかたむけ、かんにんとは四字にて侍らずや、と指をもてかぞへ、御許にはをぼし違へなるべし、かんにんと四字にて侍る、といへば、異見せし人云、愚昧の人かな、堪忍とは、たえしのぶとよみて、二字なり、といへば、又かうべをかたむけ、たえしのおならば、又一字ふえたり、五字となり侍

其の愚には及ぶ可らず

歌の之字

るべし、何と仰ありとも、我等は四字ともひ侍れば、四字にてかんにんはいたし侍るなり、といへるに、その人又云、汝が如き愚昧の文盲は、實に諭しがたし、人に似て虫同様なり、おのれがまゝにすべし、と大いにいきどほりければ、文盲の人笑て、何とも仰あるべし、我等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても少しも腹立侍らざるなりとて、笑ひ居しとぞ、その智には及ぶべく、其愚にはおよぶべからず、(雲萍雜誌)

世事觀し來れば、此類の事多し。一問一答、讀んで其の末節に到れば、機鋒俊辣、眞に其の愚には及ぶ可らざる也。

◎の之字歌の事

靈元法皇の御製

老の身の腰ののひたる杖つきののの字のなりの字のことくにて

中院通躬公

武者小路實陰卿

のの宮ののちのしのよののちのよのあきのかたみのたねののこりて
かたかなノノノ字ノなりノ似たもノノさノ葉ノ繪ノすみの一ふて

風早公長朝臣

まるのののの字のなりの世の中の人このころのまるきのそよき
《翁草》

◎氷るまもなき水車

高貴の人は日々に美食に飽て、安逸に住するが故に、多くは種々の病
ありて短命也。農を業とする百姓は、平日飧食をなして、日々耕作に
身體を働かしむるゆえに、無病長壽の者あほし、爰をもつて流水腐ら
ず、要樞蝕ずとは古人もいへり、この意を、五色墨の蓮之といふもの

氷るま
もなき
水車

句に

精出せば氷るまもなき水車

とは申しき、《理齋隨筆》

轉石苔を生せずと云ふも、此理に同じ。飽食暖衣は、最上の短命丸
也。閑居不善を爲すは、手柔かなる自殺法也。

◎御用心

一休禪師紫野におはせしころ、人の書をもとむるものあれば、御用心
と書てあたへぬ、しみて他のとをもとむる者あれば、御用心と、
いくつも書給ひ、又上に只といふ一字をへて、只御用心とか、せ給ふ
ともありとかや、いともあもしろし、その語すべての事にかよひて、
教訓とはなりにけり、予もまたそれにならひて、用心の二字を合せて、
一字に作り書り、その文に云、

御用心

鳥渡見れば忍ぶに類し、
倉忽に見れば恩にひとし、
はるかに見れば思ふに似たり、

天龍寺の歡道といふ僧これを見て、
棄恩入無爲、眞實報恩謝といふ文
意に、何となくかよひておかしといへり(雲萍雜誌)

用心と、耐忍、世に處し自から修むるの心得、
殆んど此に盡く。眞に各個人の護身符と云ふ可き也。
玩味せざる可ん哉。

◎書札文字の死活

書札の文字にも死活あり、たとへば一筆啓上仕候より、
御無事御堅固云々、私宅無恙、時候御自愛、
猶期後音云々は、何事もなきにも、
書くもかゝざるもしれぬ程の事なり、
其間に、此間の寒氣は、
弊郷は海濱に氷を見、
或は半月一月の早なるに、
よそには夕立すれども、
こゝにはふらずなどいふは、
おなじ寒暄を叙ぶるにも、
其の地の氣色もあ

もひやられて、書狀の文字も活するなり、
月日の末に此の書認めたる時は
雨しきりにふり、時鳥二聲三聲
おとづれぬなどかきたるは、
いよゝ其の時其の人のすがたも
おもはるゝ様にておもしろし
長さ三尋あまりある書札にても
死したるあり、三行四行の書にても
活きたるあり、これらは書札にか
ぎらず、詩歌連俳にては心づくべ
きことなるべし

《筆のすまび》

流石に菅茶山翁丈けありて、
其の著意の尋常ならざるを見る。
俗を化して雅となし、
陳を化して新となし、
乾燥を化して多趣となす、
實に此に外ならず。
苟も善く此の意を解せば、
眼中の萬物一として、
我が資料たらざるはなかる可し。

書牘三片

各地の友人、若しくは未見の友人より來書、机上堆を爲す。逐一返辭を裁するに懶し、偶ま其の一二を茲に採録す。必らずしも信書の秘密を破りたる咎なかる可き歟、何となれば答書を作りたるは、仙客にして、相手は——讀者の眼中には——無何有郷の烏有先生なれば也。

其一

○拜復、如來諭秋暑難凌候處、御清祥の由、大慶に存候。陳れば近來は、戀愛詩構作の順序として、戀愛哲學御研究の旨、致承知候。抑も貴兄は體量十八貫、身丈け五呎六吋、十人前の身體を以て、何を苦んで斯るつまらぬ事を被成候哉。戀愛杯と申すは、畢竟精神病者か、左

戀愛は精神病者の閑事也

なくば精神病に感染した輩の閑事業にして、無病健全なる男の頓著す可き事には無之候。若しさる閑暇もあらば、前庭に飛び下り、庭石と角力でも御取り被成候方可然と存候。平生の交誼に對し、出鱈目のみ申述、恐縮々々、長者江海の量、御容赦是れ祈る。

其二

○不相變、兒童教育の爲めに、御骨折何寄りの儀と奉存候。然るに貴兄と同時に師範學校を卒業被致候何某君は、既に高等官何等に進み、前途の希望洋々海の如きに引き代へ、貴兄のみ依然たる吳下の阿蒙にて、如何にも心苦しく、されば都門に出で、何ぞ功名の途を求め度、小生にも一臂の力を假し可申旨、貴兄心事逐一致諒承候。若し小生に相叶ふ儀ならば、一臂のみかは、兩臂與に差し出し可申候間、此邊は決して御掛念に及び不申候。然るに人間の職業は、必らずしも官等の

兒童教育

高下や、俸給の多寡を以て、其の差別を爲す可きものとも思はれ不申候。貴兄が教育家たる可き資格なしとならば、他に職業を轉ぜらるゝも、致し方なき次第に候得共。只だ同學の何某君が立身したる爲めに、自から教鞭を抛たねばならぬとは、恰も隣家の娘が、華族様の奥方となりたりとて、自分の縁附きたる家を去りて、再嫁の口を求むるも、同様にして、頗る可笑しき理窟と存候。固より人間は理性のみの動物には無之、されば、同學の連中杯が威張り散らすは、聊か片腹痛からざるにあらず。『同學少年多不賤。五陵衣馬自輕肥』の感は、何人にも有之候得共、そは全く妄想に外ならず候。爾は爾たり、我は我たり。決して傍目を振らず、我は他人と比較するの必要なく、我は我が爲す可き分を盡せば足ると存候。斯る言を申上候は、釋迦の前の説法に候得共、鄙衷を披き、御再考を仰ぎ度候。惟ふに教育の事業は、華美な

爾は爾
たり我
は我た

らざるも、是程濟世の要に適し候ものは可無之と奉存候。正直に申せば、小生は寧ろ貴兄の職業が羨敷御座候。不取敢貴答のみ勿々不一。

其三

禪學の
修業の

鎌倉よりの朶雲飛來、机上清風颯至、感謝々々。扱近日は禪學とか申すもの御修業にて、坐禪三昧に御暮らし被成候由。例に仍りて大兄の物數奇には、敬服致し候。彼の隻手の聲とか、赤手の聲とか申すとは、既に御會得被成候哉。若し然らば御垂示の程奉合掌候。坐禪すればとて、必らずしも坐禪豆のみを喫せねばならぬ譯も、可無之候間、折角御營養專一に存候。知惠も、分別も胃腑の充實したる後に候。嘗て中江兆民翁に承り候には、同氏が鎌倉にて、禪學修業中、竊かに佃煮を袖にして山門に入りしに、満堂を葦殺し、自から閉口したる由に有之候處。今や二十世紀の時世、山門とても葦酒の爲めに、開放せられ居

中江兆
民翁と
佃煮と

劉氏明遠庵

たる所ありしもの、如かりし。伯の身世を觀望すれば、伯や斯句に孤負せざるものと謂ふ可し。

劉氏明遠庵

元好問

豪氣元龍百尺樓。

功名場上蚤抽頭。

路人不識閑居士。

袖手雍容活兩州。

惟ふに此の閑居士は、自個廣告家にあらざりしなる可し。彼は其の名よりも、其の實を重しとしたるものなりしと思はる。

朱彝尊の詩

送趙秋水還永年

朱彝尊

離堂卜夜且成歡。

酒盡休歌行路難。

四十逢時猶未晚。

看君騎馬入長安。

豈唯四十時に逢ふの晩からざるのみならんや。太公望の如きは、八十にして時に逢ひたりき。

王安石の詩

入瓜步望揚州

王安石

落日平林一水邊。

葉城掩映祗蒼然。

白頭追想當時事。

幕府青衫最少年。

徹夜讀書に耽りたる少年官吏、起て天下の政を執るも、亦た是れ老書生の風味を帶ぶ。

とと存候得ば、決してさる心配はなかる可く存候。序でながら小包郵便に托し、近頃流行の『蚊屋いらす』を進上致し候。禪榻の側に燻し給は、聊か蚊軍の來襲を防ぐとも出來可申歟。併し最上の策は、蚊の裡にて、坐禪することに候。折もあらば御試みありて可然存候、御序もあらば、最明寺入道殿にも、宜敷御傳聲可被下候、以上。

愛吟 一一一

頃ろ『況翁叢話』を讀むに、石黒翁の愛吟數篇を載す。予も亦其の響に倣ひ、記憶の儘、一二を録し、同好の一讀を請ふ。

題鳥江亭

題鳥江亭

勝○敗○兵○家○事○不○期○

包○羞○忍○恥○是○男○兒○

江○東○子○弟○多○才○俊○

卷○土○重○來○未○可○知○

杜

牧

耻包羞忍

歴史論として見れば、王安石の『百戰疲勞壯士哀。中原一敗勢難廻。江東子弟今雖在。肯與君王卷土來。』の絶句、寧ろ其の正鵠を得たるに近し。されど予は到底『包羞忍恥』の詩を、愛吟中の第一位に置くを禁ずる能はず。

想起す、往年陸奥伯と緩晤したる時、伯は斯句を提唱し、頻に神契し

劉氏明遠庵

たる所ありしもの、如かりし。伯の身世を觀望すれば、伯や斯句に孤負せざるものと謂ふ可し。

劉氏明遠庵

元好問

豪氣元龍百尺樓。路人不識閑居士。

功名場上蚤抽頭。袖手雍容活兩州。

惟ふに此の閑居士は、自個廣告家にあらざりしなる可し。彼は其の名よりも、其の實を重しとしたるものなりしと思はる。

朱彝尊の詩

送趙秋水還永年

朱彝尊

離堂卜夜且成歡。四十逢時猶未晚。

酒盡休歌行路難。看君騎馬入長安。

豈唯四十時に逢ふの晩からざるのみならんや。太公望の如きは、八十にして時に逢ひたりき。

王安石の詩

入瓜步望揚州

王安石

落日平林一水邊。白頭追想當時事。

葉城掩映紙蒼然。幕府青衫最少年。

徹夜讀書に耽りたる少年官吏、起て天下の政を執るも、亦た是れ老書生の風味を帯ぶ。

人は自ら
知らざるに
苦しむ

世界の
不思議

世界如何に
日本國に
民を
つかは
るか

外より見たる日本人

人は自から知らざるに苦しむ。自個は必らずしも自個の安全なる批評者にあらず。吾人は假令他人の批評に盲従する能はざるも、亦た多少參稽に資す可きものなくんばあらず。

日本國民は、如何なる國民なる乎。彼等は實に當今世界の不思議のいたり。其の當人たる日本國民も、其の傍觀者たる世界の國民も、未だ明白精確なる解答を與へたる者なし。而して若し適當の解答者あらばそは二十世紀劈頭の哲學者にあらずして、二十世紀下半の歴史ならむ。日本國民は、如何なる國民なる乎。吾人は大早計に臆斷を逞ふせざる可し。然も世界が如何に日本國民を見つゝあるかを知るは、吾人に取りて、多少の興味と利益となくんばあらず。吾人は必らずしも其の評

言に甘服せざる迄も、他人が我に就いて見る所の如何を詳にするは、豈自から猛省し、自から奮勵するの動機たらざるなきを得ん哉。

吾人の寡聞なる、固より之を悉くすの自信なし。但だ座右の諸書を攤し、試みに其の二三を掲げんか。日本を始めて世界に紹介したる、元主忽必烈の外臣、威尼斯の旅客マルコ、ポロは我國に就て左の如く語りぬ。

Chipangu は、大陸の東千五百哩の大海中にある大島なり。人民は白色にして、文化進み、天然人事共に優る。彼等は偶像教徒なり。余は茲に日本人が有する黄金の無限なる事を特に書かざるべからず。黄金は島内に多く産す、而して王は之を輸出するを禁するが故に、其の量限りなきなり。其上彼の地は大陸を遠く離るが故に、商人の行て黄金を取り去るものなし。

マルコ
ポロ
の談

國王の宮殿の家屋は、黄金にて作られ、其價量るべからず。そのみならず、宮殿の床も窓も凡ての家具凡ての器具純金にて作らる。彼國には眞珠も多く、其色紅色にして美なる事譬ふるにもなし。人民は死人を火葬するとき、其死人の口に眞珠を入れて焼くの習慣を有す。寶石の量、種類また甚だ多し。

マルコ、ポロの語る如くんば、日本は黄金國、珠玉國と謂ふも、過當ならざるに似たり、然るに其實を語れば、我國の黄金は、内地に生産したるよりも、三韓及び支那より輸入したる者多きに居るとは、史家の認むる所なり。但だ折角累積したる黄金が、安政の開港以來、其の金銀の對價、甚だしく世界の相場と差違ありし爲め、即ち金一銀六の相場なりしを以て、黄金は、恰も隨一の輸出品たる姿をなしたるぞ遺憾なれ。

マルコ、ポロ又た元寇に就て語りて曰く。

大汗の兵大島の一隅に上陸したるとき、一城を攻めたるに、城兵降らざりし故、盡く之を斬りしに、八人の兵は如何にしても傷かず。是れ其の肉と皮との間に石を填めたるが故なり。棒を以て打ち殺し、撿したるに體全部に石ありたり。

是亦た希聞にあらずして何ぞ。

懲惡錄は、朝鮮人柳成龍の著作にして、彼が我が太閤征韓の慘劇を観て、其の慷慨の志を寓したるもの也。其言に曰く、倭最も奸巧、其の兵を用ると殆んど一事の詐術に出でざるはなし。然れども壬辰の事を以て之を観る、都城に工にして、平壤に拙なりと謂ふべし。我國昇平百年、民兵を知らず、猝かに兵の至るを聞き、倉皇、顛倒し、遠近靡然として皆魂を失ふ。倭破竹の勢に乗じて、

旬日の間徑ちに都城に迫り、智をして謀るに及ばず、勇をして斷ずるに及ばざらしむ。人心崩潰して收拾すべきなし。此れ兵家の善謀にして、賊の巧計なり。故に曰く工なりと。是に於て乃ち自ら常勝の威を恃で、而して其後を顧みず。諸道に散出して其狂肆に任ず。兵分るれば則ち勢弱からざるを得ず。千里營を連ね、曠日持久す、所謂強弩の末は魯縞を穿つと能はずして、而して張叔夜の所謂女眞は兵を知らず、豈に孤軍深く入て能く其の歸を善くする者あらんや。殆んど之に近矣。是を以て天兵四萬を以て平壤を攻破す。

是れ用兵の得失を論じたるものなれども、亦た我兵の慄悍にして突撃に長じ、持重耐忍に短なるを諷示するものにあらざるなきを得んや。吾人は元龜天正の日本人に就て、太閤記よりも常山紀談よりも、武將感狀記よりも、藩翰譜よりも、寧ろ當時の天主教師たる外人の見聞録

によりて、知る所多きを覺ゆ。試みにクラツセの西教史を繙けば、實に左の如きものあり。

日本全州を一大戰場と云ふも、誇大にはあらざる也。

支那日本に至りて、其の文物を窺ふに、遙かに伊國に勝りたりと云はざるを得ず。

日本人は強壯不羈にして、戰鬥に堪ゆ。其容貌橄欖色なれども、支那人は之を目して白人と云ふ。身體長大にして、精神活潑なり。其の軀幹に至りては通常中等に位すべし、此れは北方の人に一步を譲る所なりと雖も、敏捷なるとは之に勝れり。

日本人の物に堪え忍ぶと實に感ずるに堪たり。飢渴寒暑に屈せず、勤務に倦まず、其他都へての困屈を堪へ忍ぶの美質あり。職工農夫も宮中に育ちたるの觀あり。

義理に鋭し。彼等には名譽體面より重き者はなきが如し。

日常の事業に於ても、名譽を得ると出群の成功とを好むが故に、只一途に自分の職務を勵み、如何なる小事と雖も不當の所爲をなさず、又之を口外せざる事等によく注意を加ふ。且つ日本人は、其の身分に准し。責任の義務を怠らざるに由り、不正の言語を發し、損害をなすと従て少なし。而して諸人互に相敬し、就中貴族等の禮讓に至る事能はず。又彼の下賤貧困なる傭夫の如きに至るまで、相互の禮敬あるのみならず、當然正理の待遇を好む。日本人は貪慾を嫌忌す。若し一人貪慾なるときは、目して卑劣醜體廉耻なき者となす、亦名譽を希望するに因る也。

日本人は甚だしく父母を尊敬する國民なり、君主の行に於て賞讃すべき事あり。即ち諫臣を侍せしめて、自ら正しからんと希望する事なり。

日本人は眞に人を尊崇し、貧困の故に人を侮る事なし、彼等は貧困を耻ぢず。

日本人の勇氣の猛なると堪忍力の強きとは、敢て測知るべからず。彼等は喜怒を色に表はさず、彼等は多言短慮を賤む。

又階級的思想は、日本人の社會的思想の重なるものなり。

是れ三百年前に於ける、吾人の父祖の面目を活躍したるもの。而して三百年後の日本人は如何。彼等は果して名譽體面よりも重しとする者なき乎。彼等は果して貪慾を嫌忌する乎。

現時の日本人は、如何に歐米人の眼に映ずる乎。彼等の側には、日本

人最負と、日本人嫌ひとの、全然背馳したる種類あるを記憶するの要あり。吾人は寧ろ其の中庸に近き者に就て、今ま茲に其の一二の例を擧げんと欲す。

ニユートントン氏は、日本人の特質を記して曰く。

日本人は矮小なる體軀、黄色の皮膚、黒色の粗らき髪、黒き眼、少し厚き唇、甚だ高からぬ鼻を有する人種なり。其の目は稍と支那人に類す。彼等は支那人と異り、運動坐作活潑敏捷にして、而して禮讓を重んず。其の禮讓と儀容との點に於ては、彼等は東洋の佛人なり。彼等は其隣人支那人と異り、士風を重じ、勇敢にして、高度の愛國心を有す。愛國心の爲めに、彼等が身命を惜まざるは、大に賞讃すべき點なりとす。彼等は其國の古き事を誇る、彼等の排外思想を有するは、其の國民的性質に起因したるものにあらずして、彼等

の外人と交りし歴史が然かせしめたる也。

ザグイエール(羅馬教宣教師)は三百五十年前、其の手紙に曰く、『世界の異教人民中、日本人の如く、天然に善良なる人民はなし』と。又彼は同し手紙中に『彼等は善き事、正しき事を知らんと欲するの念、驚くべく強く、彼等はまた之を學ばんと欲するの熾なる熱心を有す』と云へり。

アダムス(英人にして、徳川家康の顧問となりたる者)も亦た然か云へり。千八百七十三年東京に至りたるグリップスは曰く『日本人の如く禮儀正しき閑雅なる國民は他に見るべからず』と。著者の觀察する所によれば、彼等は腦力敏捷にして、美を愛し、勇敢にして禮節を重じ、愛國心に富み、智識を好む。然れども相互に信任するの心薄く、猜疑の心多く、其美術心に富み、風俗の優雅なる事は、世

界中之に勝るの人民なし。彼等は心の激せざる時、偏僻に支配せられざる時は、頗る親切なり。然れども其の一度怒るや復讐心強く、殘酷なり。是れ彼等の特質にあらずして、其封建時代の歴史が然かならしめたるものならむ。

餘事は兎も角も『相互に信任するの心薄く、猜疑の心多く』の一句は、確かに我が國民の弱點を指摘して、其の肯綮に中りたるに似たり。然も其の原因を以て、封建時代の歴史に歸したるは、著者忠厚の見にあらざるならんや。但だ著者の引用したる三百五十年前、我が國民を濟度せんとして、一命を抛つ決心を以て、萬里の波濤を蹈み來りし高僧ザヴェールの、吾人の祖先を評したる言は、今尙ほ吾人に適用するを得可きや否や。吾人若し祖先の特質が、此の如きを知らば、豈に祖先を辱かしめざるの醒覺なくして可ならんや。

更らにヒョリ氏の觀察を掲げしめよ。吾人は其の餘りに詳細なるが爲めに、逐一之を批判するの勞を避け、直ちに其の文句中に、意見を挿入するの便に就けり。

世界の漫遊者は、數週間日本に徘徊して、而して輕卒に日本人を批評して曰はん。

『日本人は虚言の國民なり』

『彼等は只だ摸倣者なり、創造力は皆無なり』

『彼等は變心し易く、信用し難き國民なり』

『不行儀は、日本國民の特性なり』

是等は皮相の觀察たるや論なし。「記者曰く然り」

日本人の體格は、上部發達して、下部は發達せず。「記者曰く當れり」
上流人士の面貌と、下等社會の容貌は、大に異り、恰も二人種の如

し。
日本人は愉快なる人種なり、生活の心配を、餘り重く感ぜざるが如く、外觀は常に幸福なるが如し。彼等は華美なる事、及び華美なる色を好む事甚だし。

禮儀を好み過ぎて、虚偽の形式に近し。「記者曰く、或は然らんとを恐る。」日本人は智力の驚くべく發達したる人種なり。彼等が學を好むと、學理を理解するの速かなるは、著しき事實なり。然れども彼等は身體虚弱の爲めに、長く研究を繼續する能はず。「記者曰く、身體虚弱の爲めのみならず、大志なき故也。」

日本にては、個人の人格に對する觀念は、頗る發達し居らず。是れ古來一個の人を社會の單位として觀ず。一家族一階級を一團體として、觀たるが故なり。「記者曰く、評し得て允當。」

世界中日本程愛國心の強き人種なし、日本人の愛國心は忠君心なり。

「記者曰く、大に然り」

國民主義餘り盛なる自然の結果として、排外思想も亦強し。

日本人は、幼少より父母と教師と役人とに絶對的服従をなすべしと教へられたるが故に、極端に服従的にして、官權に對しては始んど卑屈的なる程服従的なり。殊に小役人をも尊敬するは笑ふべき程なり。是れ日本人の獨立心なく柔弱を意味するものなり。

故に日本人は何事も官より仕て貰ひ、自ら進んで事を企てず。鐵道電信等總て政府の事業なり。近頃私人的事業起りたれども、概して日本人を歐米人と比較せば、獨立心企業心なきは其の特性なり。

日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛玩す。日本人は何事も受け入る、胸懷洞然た

る人種なり。彼等は儒教を受け、佛教を受け、また彼等の一部は基督教を受け入れたり。基督教が十分に入れられざるは、國民が眞理に對して反撥心強き故にあらずして、彼等が何事をも受け入るゝ故、誤解をも容易く受け入れ、基督教を誤解したるが故なり。彼等は眞理も迷信も受け易き國民なり。彼等は哲學を好む。然れども彼等の哲學を研究するは、最深最高の學を究めて、人に誇らんとするが故にして、彼等は眞理其物の爲めに思索するものと思はれざるなり。彼等は多くの批評家の曰ふ如く、思索の國民にあらずして、寧ろ實際的國民なり。〔記者曰く、或は形式的國民たらんとを恐る。〕日本人は物に飽き易く、變り易き性質を有し、徹頭徹底の元氣なし。彼等は大力を以て大計畫を始む。然れども久しからずして之を變更し、若しくは廢止す。彼等は遠大の目的を立つれども、之を仕遂ぐるに大切なる

能力を缺く、彼等の多くは一生涯に幾度となく其の職業を變更す。〔記者曰く、我が國民頂門の鐵針、〕彼等は矛盾せる腦髓を有す、そは彼等は天皇の命令は如何なる事にも犯すべからず抗すべからずと云ひつゝ、彼等の多くは天皇より發せられたる法律を平氣にて破る。彼等は基督教は西洋の教にして東洋人に適せずと云ひつゝ、西洋の學問制度を採用しつゝあり、是れ實に不思議なる國民にあらずや。日本人は發明の國民にあらずして、學ぶ國民なり。彼等は始め朝鮮の弟子にして、後支那の弟子となり、今は歐米の弟子也。彼等は何等の大發明をなさず、人力車を發明したりと誇れども、人力車も一宣教師が其の不具なる妻の爲めに發見して用ゐしを、日本人が學びたるなりと云ふ。日本人は摸倣に長ず、然れども單純なる摸倣者にあらずして、よく國事に適用せしめ、適當に變化して採用す。彼等

は模型を興ふれば、何物にても作る。彼等は大意を授くれば、他は自ら作る。彼等が歐米の郵便電信の制度を學びて、之よりも優等なる制度となしたるも其の一例なり。

日本人の命を輕ずるは、他國に比類少き現象なり。是れ封建時代の習慣と佛教との及ぼせる影響なり。「記者曰く、第五聯隊凍死事件を見よ、日本人は感謝の念に乏しく、否な一時は、大に感謝心を起すも、忽ち消えて長く續かず。

日本人は事務的道義心に乏し、彼等は商業を以て詐術と思ふものゝ如し、商業上に於て虚言は至當の事と考ふ如し。「記者曰く、是れ我が商工業に於ける大病痛處」米國より日本に來りし最初の外交官タウンSEND、ハリス氏に『日本人は地球表面の最大虚言者なり』と云へり。

日本の政府の學校に久しく教鞭を取りし一外人は『日本人は隱蔽と虚言の國民なり』と云り。

然れども日本人は公事に於ては最も正しき國民なり、彼等其愛國心と共に公事に忠なり、私事に於ては道德低きも、公事の道德に於ては東洋第一なり、否な西洋人も大に學ぶべきものあり。

吾人は上記の觀察の聊か見當違ひなるを認めざるにあらず。且餘りに日本人の弱點を誇大ならしめたるを知らざるにあらず。吾人をして辯正の任に當らしめば、必ずしも其の材料に究せざるにあらず。されど他山の石、豈に玉を攻くの具たらざらんや。吾人は却て如何なる眼孔あれば、斯くは我が國民の内相（敢て真相と謂はず）を描きたるかを驚かずんばあらず。吾人は寧ろ此の忌憚なき批評に對して、自から猛省するの、知慧ある業たるを見る也。

最後に吾人をして、徳川氏鎖國令を布く以前に、我國に來船したる英國商船の船長リチャード、コックスの日記中より、左の一節を摘譯せしめよ。

日本人は、些少の罪にも死を與ふ。

不名譽を蒙るを忌みて割腹せり。

彼等の中には、其の主人の死するとき、主人の冥土の御伴として自

殺するものあり。

日本人の外國風を採用するの速なるは、其喫煙の傳播の速なりしに

て知るべし。

喫煙の傳播を以て、國民の特性をトす。該日記の作者に於ては、固よ

り一寸したる思附さに過ぎざれども、亦た觀國の眞訣を得たりと謂ふ

可し。而して特性の微物に對して暴露する所、豈に輕忽に看過す可き

ものならん哉。

諛言を悦べば、諛言至る。苦言を悦べば、苦言至る。

明治三十八年 五月廿三日

記

者

言語文字と文章の關係

（高等師範學校國語學會に於ての演説）

民友社
文章派の

只今會主より、私が歐羅巴の文體を輸入し、民友社一派の文章を發明した杯と、事實に不似合なる、結構な御紹介で却て當惑に存じます。實は本會に出て何か話をしろとの事でありましたが、私は國語に就ては、至極の素人で、且つ過去に於ても、現在に於ても、更に未來に於ても、國語研究杯と申す面迫るとは、殆ど注意す可き必要を感せぬものであります。折角の御依頼故、只言語文字と文章の關係に就て、私の思ふ處を述べるのみであります。勿論私は國語研究と言ふ事には賛成を表しますが、兎角國語研究杯申して、實際に必要なならざる、また用ひられざるものを、彼是小面倒小八ヶ間敷御吟味なさる事は願ひ

辭達而
已矣

度ない。むしろ何處迄も實際の方面に就て研究し、心に感じ目に觸るゝ事を説明し、言明し得る丈で、即ち孔子の『辭達而已矣』を以て目的として進まれないことを希望して止まない。勿論専門家の研究は研究で結構なれども、兎角學者てふものは、妙に理窟をつけ、物事の難題を惹き起す癖があるもので、切言すれば國語研究會、却て研究其物の障害物となる恐れもなきにあらざらぬと思ひます。此邊は然る可く御注意を願ひたい。

文字的
亂世

此れより本題に入りますが、扱て今日の新聞雜誌を見ると、實に今日が文字的亂世であることが分る。片假名、平假名、漢字、點、線等の種類があり、甚しきは三角點やら或は殆ど幾何學に於ても見る能はざる、一種變挺來の點を附するものさへあります。されば一度び印刷に附せようとする、其困難が一通りでなく、植字をする所は、恰も天

長節夜會の舞踏の如く、彼處に飛びて、一字を拾ひ、此處に跳ねて、一字を拾ふ。其状態實に笑止千萬である。然るに倫敦の『タイムス』や、紐育の『ヘラルド』や。紙數に於ても、更に行數若くは字數に於ても、我邦の新聞とは、比較の出来ぬ大新聞に於て、其植字部の整頓して簡便、靜肅なる、驚く可きものである。如何なる大論文でも、恰も小さき風琴の如き器械に向ひ、其器械の前面に排置せられたる字母に向て、指頭の觸るゝと、其字母は、器械の一部なる釜中の鉛汁を壓して、自から行型ライナタイプとなり、恰も紙面の一行となりて出て來る。此の行を順序に排列すれば、立派に大文章が組みあがるのである。

私が倫敦に参りました時、倫敦の東部なるエヂンボロ館にて、自由黨の領袖サー、ウヰリアム、ハルコート氏の演説を聞きに行きました。演説は一時間餘まりもかゝり、午後十一時過ぎに終りましたにも係

はらず、翌朝の『タイムス』を臥床にて見ますと、其の演説の殆んど一字一句もぬかえず、細字三段餘も填めて居ります。此れは新聞社が機敏なばかりではなく、實を申せば、植字印刷の輕便なるが爲めです。而して其の輕便なるも、詰まり言語文字の輕便なるが故である。

新聞記者の經驗から申しますと、議場の討論が六時までもかゝる時は、之を筆記し、印刷して十時の瀛車に間に合せる事は、實に困難で、もしそれ九時にでもなろうものなら、新聞社には恐慌を來たすのである。即ち翌朝三時迄かゝりたる例しもあつた。今日の新聞記者は、實に苦しき位地に立て居る、讀者に充分の満足を與んとするには、隨分面倒なる文字を使用せねばならぬ必要もある。なぜなれば謂ひ度き丈の言を謂ひ盡さんとするには、餘儀なく、漢語でも、俗語でも、時としては歐文でも混用せねばならぬ必要がある。併し印刷の必要に迫ら

れて、自から使用する言葉にも制限を措かねばならぬこともある、否
 な多くある。要する所新聞紙ありて以來、兎も角も我國の文章は、平
 民化したに相違ない。我々は期せずして、言文一致の方向に、國語統
 一の方向に、更らに一步を進めて云へば、國語改良の方向に、加勢し
 て居るものである。

私しが知り得る限りに於て、日本の文學史を見ますれば、言語文字が
 何處迄も附き纏ふて、文學發達の妨げとなりて居る様に思はれる。即
 ち日本人は如何なる事を書くべきかと考へるより、寧ろ如何にして書
 かんかを考へたるは今更ら珍らしきとでない。遠く一千年の昔、三善
 清行が封事を奉りし時も、近くは井上毅、元田永孚諸君が教育勅語を
 草したる場合も、より多く頭腦を悩ましたる問題は此であつた。承れ
 ば明治二十二年憲法發布の勅語の如きも、伊藤侯と井上毅子とが四十

餘日を費して、推敲せられたさうです、然も其の苦心の大半は、勿論
 如何にして書くべきやに費したに相違ありません。

固より言語や文字なくして、文學が出来る筈はない。然るに我國に於
 ては、此の文學の發達に最要なるものが、却て其の妨害をなしたりと
 云ふは、如何にも不思議である、併し争ふ可らざる事實である。其の
 理由は我國の文學者は、言語の開拓を務めずして、襲用若くは復古に
 非常に苦心をした。一言にして評すれば、足に合はせて靴を造るので
 なく、靴に合せて足を造らんとした。例せば物徂徠の如き一代の文豪
 も猶ほ、李于鱗、王元美等の古文辭を襲用せんとし頭を悩し、其絶大
 なる精力の過半は、數千年前支那人の文調に摸倣するとのみに消磨し
 た。加茂真淵の萬葉復古も、笑止千萬である。中井竹山の逸史の如き
 も、全く左傳の語調に擬したる痕が見えます。頼山陽の日本外史は日

本的精神を以て日本歴史を綴らんとしたにも係らず、尙ほ史記を眞似して其の範圍を離るゝ事が出来なかつた爲め、往々文章の爲めに、否な文字の爲めに、事實を曲げて居る。其他我國の有ると有らゆる文學者の著述の如きも、概して徒勞者の記念碑となり了りたるは、如何にも慨嘆に堪へない次第と思ふ。但だ新井白石の藩翰譜、讀史餘論とか、太宰春臺の經濟録とか、熊澤蕃山の集義和書とか、貝原益軒の養生訓とか、室鳩巢の駿臺雜話とか、申す、餘りに文字文體に骨を折らず、唯だ達意盡情を主としたるものか、今日に於ても日本文學の發達を誇る可き資料となりて居るのである。言葉を換へて申せば、彼等が不用意の著述が、却て文學の發達を助けて居ります。或は我が國文こそは、固有の言語だから、文章にも適當と申す人あれども、私しの目には、萬葉假名の如きものは殆ど『ベビロン』『アッスシヤ』の針形文字と同

様に見へる。序でながら申しますが、我が中學校杯にて、餘りに國文學を獎勵するが如きは、餘程考へねばならぬと思はれます。要するに文章とさへ云へば、支那なり、日本なりの古き、死せる、若しくは半ば死せる言葉を、殆んど如何なる場合にも襲用せねばならぬてふお定まりは、是非共打破らせねばなりません。

此れから襲用若しくは復古の弊害に立ち入りて觀察すれば、つまり言語文字の爲めに、文章上に於ける事實若しくは意思をも犠牲となさしめた。諸君に手近き例を申せば、西郷は一代の英雄で、しかも質朴飾らず僞らざる人であつたけれども、猶月照を吊ふの句に『相約投淵無後先』とある。半長右衛門こそ桂川に飛び込んだのだから、淵に投すと申してもよからうが、然し南洲と月照とは薩摩瀉で身を投じたものが、淵に投ずとは如何にしても奇怪千萬である。此れは詩だからと申

しても、矢張り言葉の爲めに、事實を曲々に相違ない。又有名な、高蘭亭か三叉月夜汎舟と言ふ詩に、三叉中斷大江秋。明月新懸萬里流。欲向碧天吹玉笛。浮雲一片落扁舟。とあります。碧天に向て玉笛を吹かんと欲するは、當人の希望を言ひ現はしたるものだから、一向構はない。併し墨川はどうしても大江と言ふ事は出来ない、もし墨田川が大江であらば、楊子江、ダニエールは河と呼べきか。六町一里に計算しても、墨田川は萬里の流ではあるまい。或は白髮三千丈の如き假想なら勿論勘辨が出来ますれど、既に三叉に舟を汎ふてふ確なる場所が極りて居れば、詩でも歌でも其の場所柄に的實ならねばならぬです。想像のみの産物たるミルトンの失樂園の如きは、其の惡魔の天國と挑戦する軍議の模様すら、何となく英國議會の討論を聯想せしむる程である。事實に遠き事を、事實らしく叙すると、事實其物を、丸るで假

ミルトンの失樂園

構のみとなすとは、國民性情の相違とは申せ、雲泥の相違である。此れは詩歌ばかりでなく、假令へば太平記の如き名文も、其の叙景の如きは、殆んど抽象的の閑文字である。馬琴の八犬傳の如きは、地理や時代には餘程確實らしくあれども。其の對話とか、若しくは風景を描く所は少しも當てにならぬ。近くは東海散士の佳人之奇遇も、其の仲間である。此の弊害は學者ばかりでない、小學若しくは中學生徒の作文の如きも、漢文に僻せざれば和文に偏し。事實杯は一向に頓着せず、唯だ文學を奇麗に駢べると丈を、骨折りて居る。此れは誰れの過ちに歸しますか。

私しが國文に對して感ずる處は、恰も土佐繪に對して感ずると同じい事である。私しは之を愛する、嘆美する。併し土佐日記、枕草紙の言葉や文體で、當世の用に適するとを論じ且つ叙することの難きは、矢

國文に對するに所感

張り土佐繪で、絹高帽子の紳士や、煉瓦の家屋を描くとの難きと同様である。鍬形の武者や、若しくは下げ髪の御姫様や、剃眉涅齒の公家や。或は障子もなければ、雨戸もなく、坐敷より椽側となり、直ちに茅薄生ひ茂れる庭となる古代の家こそ土佐繪には、妙と思ひます。第十九世紀の繁雜なる生活は、とても彼の簡單なる描法の盡す所ではない。國文の缺點も、右の通りである。然るに國語とさへ云へば、直ちに千年前の言葉を用ひねばならぬとは、扱も難題至極ではありませんか。私しは何處迄も國文を尊重すれども、之を尊重すると、之を實用に供するとは、全く別個の問題とせねばならぬと思ひます。

言語文字の爲め意思及び事實を犠牲としたる結果、更に大なる弊害を文學の上に殘して居る。即ち文學的良心を全く顧みぬ事である。恰も平素は律儀一偏の商人が、一度算盤を取ると嘘を吐いても、毫も怪しま

ぬ如くに。筆を持つ人も、亦た其人に不似合なる事を書き散らして、毫も怪しまない。獨り當人が怪しまぬのみならず、世間も怪しまぬ。なせなれば文章と實際とは、丸るで別物と考へて居る。何人も書いたものを當にせぬ、故に當てにならぬからとて、誰れも非難はせぬ。此れが所謂る文學的良心の癡痺と申すものであらう。

韓退之の書ひた墓碑銘の如きは、原稿料次第で、勝手に褒貶を下したと申すとである。果して此の如しとせば、此れは故意の曲筆として、先づ論外に措き。我國文學者か、左程の惡意も、善意もなく、唯だ無我無心に文を綴るものを見れば、如何にも其の精確を缺いて居る、其の的當を缺いて居る、一言にして云へば、其の言はんと欲する所、其の叙せんと欲する所、其の記せんと欲する所に對して、忠實を缺いて居る。茶山や、山陽の詩か、幾分か生氣あるは、比較的此の缺點より

遠きが爲めである、少くとも彼等か其の言ふ所に忠實ならんとする、文學的良心の一點火存したるが爲めである。白石の折焚柴の記杯も、趣向は殊なれとも、忠實ならんとしたる點は同様である、故に當てになる、故に今尚ほ愛誦せらるゝのである。我國の古往今來滔々たる諸作者の文は、漢文でも、國文でも、詩でも歌でも、其文を以て、其事を知るとも難く、其人を以て、其文を察するとも出来ぬ。つまり文は何處迄も、一種無責任の假構にして、人物や、事實や、思想とは、殆んど何の關涉もなきが如くにありました。景色を描けば、唯だ峨々たる高山、汨々たる大河と云ひ、人物を論ずれば、慷慨にして奇節あり、侷儻にして大志ありと云ひ。何事も抽象的で、混沌で、不確實で、何が何やら見當が付き兼ねるものである。而して斯る無頓着は、今尚ほ文界に流行しつゝある。今の新聞紙に「斯くある」と書かれたる意味が、

「ありたき」ことやら、「あらねばならぬ」ことやら、「あり得べき」事やら、「あつた」ことやら、一切その邊の區別が分らない。更に人物評論杯を見ますると、飛んでもなきと書き飛ばしてある。或は悪黨とか、奸邪とか、一言にして其人を殺す可き斷案を、平氣で下して居る。其のくせ果して左様に思ふて書くかと云ふに、全く左様とも思へない。彼等は平氣で其の奸邪なる小人と交際して居る。悪黨と往來して居る。此れが筆の上と實際とは、一向に關係がないかの如くに考へて居る實例である。悪口か此の通りであれば、譽め方も滅法である。世には恭敬なる人が、酒を呑めば、案外なる亂暴をする漢を、酒癖者と申します例がある。今の操觚者の多くの者も、恐くは筆癖者と申さねばなりません。まします。文字に最も大切なるは、調子である。己れが思ふ所を、多となく、少

扱○み○と○な○り○て、殆○ど○身○體○が○煎○餅○の○や○う○に○な○つ○て○居○る○か○ら、何○と○も○申○上○
 げ○様○は○あ○り○ま○せ○ぬ○け○れ○共○が。チ○ョ○ツ○ト○十○分○か、若○く○は○十○五○分、長○け○れ○
 ば○廿○分。そ○れ○以○上○は○あ○り○ま○せ○ぬ○が、申○上○げ○た○い○と○思○ふ○の○は、別○儀○で○な○
 い。私○と○松○本○校○長○と○は○因○縁○頗○る○淺○か○ら○ず——さ○り○と○て○私○は○決○し○て○松○本○
 校○長○あ○た○り○の○如○き、高○襟ハイカラと○か○申○す○仲○間○と○い○ふ○や○う○に、世○間○か○ら○非○常○に○
 開○化○し○た○方○に○は、見○ら○れ○て○居○り○ま○せ○ぬ○け○れ○共——平○生○御○懇○意○の○契○合○で、
 諸○君○が○勉○強○せ○ら○れ、卒○業○せ○ら○れ○た○る○政○治○學○校○の、科○外○講○師○と○い○ふ○や○う○
 な○名○を○頂○戴○し○て○居○り○ま○す。所○が○今○日○ま○で○三○四○年○に○な○り○ま○し○て、未○だ○一○
 度○も○學○校○に○出○た○と○も○無○く、實○は○學○校○が○何○處○に○存○在○し○て○居○る○と○い○ふ○こ○と○
 も○知○ら○ぬ○位○で○あ○り○ま○す。誠○に○私○も○慚○愧○の○至○で○あ○り○ま○す○か○ら、今○日○罷○り○
 出○ま○し○て、聊○か○平○日○の○疎○懶○の○罪○を○償○ひ、科○外○講○義○の○積○で○少○く○申○上○た○い○
 と○存○じ○ま○す。(謹○聽)

そ○こ○で○別○に○御○話○す○る○こ○と○も○無○い○か○ら○し○て、先○づ○新○聞○記○者○と○な○る○の○心○得○
 と○申○す○點○に○就○て、一○二○個○條○愚○見○を○開○陳○致○し○た○い。先○刻○校○長○の○演○説○に○て○
 承○り○ま○す○ら○ば、政○治○學○校○の○卒○業○生○徒○の○中○に、新○聞○記○者○に○成○り○て○居○る○御○
 方○も、澤○山○あ○る○さ○う○で○あ○る○し。殊○に○又○學○校○の○中○に○も、新○聞○記○者○の○學○科○
 と○い○ふ○や○う○な○こ○と○が、確○か○あ○つ○た○か○と○覺○え○て○居○り○ま○す。そ○れ○か○ら○松○本○
 校○長○は、新○聞○學○と○い○ふ○本○も、御○作○り○に○な○つ○て○居○る○位○の○と○で○あ○り○ま○す○か○
 ら○し○て。貴○校○と○新○聞○記○者○と○は、餘○程○緣○故○が○深○い○と○申○さ○ね○ば○な○り○ま○せ○ぬ○。
 そ○こ○で○私○が○此○の○問○題○を○此○の○場○合○に○申○上○げ○る○も、決○し○て○藪○か○ら○棒○で○は○な○
 か○ら○う○と○思○ひ○ま○す。

(第一) 新○聞○學○と○い○ふ○も○の、あ○る○の○で○あ○ら○う○か○無○い○の○で○あ○ら○う○か○。
 是○は○松○本○校○長○に○聞○か○な○け○れ○ば○分○り○ま○せ○ぬ○が、ど○う○も○私○一○個○の○考○で○は、
 ま○だ○新○聞○記○者○に○な○る○に○付○て○は、是○が○適○當○の○學○科○で○あ○る○と○云○ふ○定○論○は○な○

い。即ち新聞記者學と申す學問は、學科とはなつて居らぬかと思ます。併しそれなら昨日まで車を挽いて居つた人を持って来て、直ちに主筆にでも据えることが出来るかといふに、夫はどうも六つかしい様であります。矢張りアップレンチスシップ即ち徒弟練習といふやうな風が大切と考へます。床屋が髯を剃る前に、自分の膝頭の毛を剃る様に、大工が一人前の大工となるに先ち、幾年か鑿や鉋と首引きせねばならぬやうに、其練習が必要である。何の職業も同様であるが、新聞記者も、初から主筆とか何とかいふ譯にいかぬので、段々稽古を積で行かねばならぬとであらうと思はれます。即いくら素養もあり、學問もある人でも、練習が必要であらうと思はれます。それはマア當り前のことである、御身の言ふことは當り前のことであるといふ、御論であれば、別に言ふこともありません。兎

角今日の青年諸君は、新聞記者になりたいから、どうか社説を書かして呉とか、論説を掲載して貰ひたいとか、いふ調子で御出でになるけれど共、さうチカ／＼右から左に思ふ様に參るものでは御座らぬ。今日では新聞學と申す専門の學科こそなければ、新聞記者は、立派に一種の職業になりて居ります。その職業に有り附くには、矢張りそれ／＼の修練熟達の必要あるは、論を待たぬ次第であります。大工でも、石工でも、初の程は唯だコツ／＼やりて行くのであるから、新聞記者になるにも、初の間はコツ／＼やつて居らなくちやならぬだらうと思ふのであります。

(第二)は新聞を書く方法であります、それは新聞を書くに、手で書くか、足で書くかといふ問題であります(大笑)足で書といふやうなことであれば、何か曲藝でもするやうに御考へになるかも知れぬけれど

手
足
書
か
か
か

共が決してさうで無い。新聞記者になるには、どうしても足で書くといふことを心得なければならぬ。必ずしも徒歩で無くても、自轉車に乗つても、宜しうございますし、車に乗つても宜しうございます、兎に角廣く世間を駆け廻りて書のです。机の前にキチンと座つて、さうしてそこで下らぬとを想像して、嘘實——殊に嘘ばかり多くて實が少ひ——色々な事を書といふと、チヨット面白いやうなものが、出来ますけれ共が、出来ても矢張り嘘はいけない。どうでも新聞記者の第一義は、先づ手で書くとは二番にして、足で駆け廻るといふことで無くちやならぬ。歩けば犬も棒に當ると言ひますが、チカ／＼棒位では無い、どれ程好い物に當るかも知れない。

諸君も定めて御承知であらう、英國『タイムズ』の主筆デレインと申す人は、近代に比類なき大記者でありました。『タイムズ』の勢力をして、

隠然一敵國に到らしめたのも、最も多く彼の力であります。然るに如何にして、彼は其の勢力を増進したのである乎。一八七六年の冬、彼は倫敦の或る晩餐會に臨みたるに、料らずも其の隣席にありし、當時の名醫サー、アンドリウ、クラルクが、本日リットン卿より熱帯の季候に關して、拙者の見込を種々尋られたと、何氣なく語り出したるを耳にし。扱はリットン卿は、愈よ印度總督の任を引き受たるに相違なしと猜斷し。それで翌日の『タイムズ』には、右の事實を報道して、世人を驚かしたと申す話がある。此れはほんの一例なれども、此れで如何に『タイムズ』の大主筆が、駆け廻り主義を實行したと申すのが分るのである。

それで世の中の人探訪／＼と言つて、何となく卑下する様に申しますけれ共が、新聞は種で作るのであつて、若し探訪を輕蔑するもので

あれは、どうも新聞は無いのだ。それで總て豪い新聞記者は、どれ程豪くても、種取りに出て歩くです。即ち豪ければ豪ひ程、新聞に、豪い種を採るのである。今日世界で一番有名な記者といふは『タイムス』の巴里通信員ブロウキッツ氏でありましょう。此先生の如きも、自分に出掛けて種を採る。自分は決して種取であることを恥ぢぬのである。此が其職務に忠實なる所以であらうと思れます。

所が日本では、残念ながらさうで無くして、少し初の中は、君そこまで行つて來玉へとでも、主筆から命せられれば、随分氣も軽く足も軽く走る人もあるけれ共。少し髯でも生えるやうになつて來て一通り新聞記者の仲間にも入るとが出来たと申す後には、段々足が重くなるのです。勿論我國の記者が悉く此の通と申すではありませぬけれども、其の或る現象に就て申しますれば、丸るで此腰が釘附になつたやうな風

になつて、どうも動かぬ。唯だ首と手とが動いて居る丈けのとで、不動様然と居据り、どうしても動かぬ。而して自分の編輯局の窓から眼鏡や何かで——或は二つも掛けるかも知れぬけれ共——覗いて、天下の形勢を論じて居る(大笑)此の調子で書くとは、どうも當てにならぬのである。私は何處までも、手よりも足、豪くなつても足、何處までも足、斯う云ふことにして、置きたいと思ふのであります。

(第三)は種を採るの方法に付て、御話を申ませう。問題は眼で採るか、耳で採るかといふ點だ。どうせ種といふものは、目と耳の外に採り様が無い。泥坊の如きは手で採りますけれ共、新聞記者は泥坊でない(大笑)若し盲目の記者があればどうも眼を使ふ譯にいかぬ、聾記者は耳を使ふ譯にいかぬ、そこで此の問題は勿論盲目でも無い、聾でも無い、普通の人として先ず研究すべきものであります。貴君方何れ

人の話
は當に
ならぬ

を擇ばるゝか知らぬけれ共が、私は一個の意見がある。諸君は何れの方と御考えなさいますか。私はどうも眼を信じて耳を信じないといふ方でありませぬ。

兎角外に歩く人は、人の話や何かを聞いて來るですが、人の話程當てにならぬものはない。皆人は嘘を言うて聞かせるものといふことは、少し世の中を悪く思ひ過したことである。皆人が自分がかつぐものと思ふのも、少し僻み過ぎて居る。併ながら自分の聞くところのものが、皆名論卓説で、立派な眞理である、それより以上の眞理は無いと思ふのは、間違ひである。例せば其人が口の先では、自分の耳に右と言ても、其人の顔を見れば、どうも左のやうな顔附の時には、耳を信ずるか、眼を信ずるかと言へば、私は眼を信ずるといふ方針であります。新聞記者の一目睨んだ眼球には、如何なる巧詐も、如何なる秘密も、決して

眼を信
ず

有力な
補充
兵

て見逃がすものではない。斯く申すと新聞記者の爲に、氣嚔を吐き過る様ですけれ共、其位の眼識が無くては、モウ新聞記者は止めた方が宜いと思ふ。

それならと言て、耳を塞ぐのぢや無い、耳も補充兵として用ゐて宜い。即ち時に取りては、最も有力なる補充兵である。併ながら何處までも、本當の兵隊、新聞記者を本當に導くものは眼であつて、何處までも觀察をすることが一番大切である。觀察と申せば、何の造作もない様であるけれども、世に注意深き、見解を間違へぬ觀察程、大切なるものは御坐らぬ。如何に寶の山を過ぎてても、双眼を閉じて過ぐれば、何の役にも立ちませぬ。如何に眼を開きても、其の著眼の點を間違れば、亦た何の役にも立ちませぬ。然るに我國にては、耳にて聞くこと丈は、追々と新聞記者諸君が、熟練しつつあるに似たれども、眼にて見ると

注意深
き觀察

は、殆んど無頓著なるは、如何にも残念である。昔は八幡太郎義家は、
亂鴻を見て、伏兵の在るを知りたりと申す話しがありますが、新聞記
者の著眼も、此位は氣が利かなくてはならぬと思ふのです。

諸君 最早お約束の二十分間も、既に半ば過ぎた様ですから、全速力

で、此の演説を仕舞ひたい。そこで唯だ項目丈を一言して置きますが、

(第四) 新聞記者となるには、骨を惜しまぬ事、面倒を厭はぬ事、此

の二個條が、心得可きことである。諸君或は此れは當り前の事だと申

さる、かも、知らぬが、その當り前の事が、決して容易の事でない。

凡そ世に新聞記者程、割の悪ひ職業はない——尤も予は他の職業に多

く従事したるとなれば、其の比較は、聊か妄斷に似たれども——若

し新聞記者になりて、骨を惜み、面倒を厭ふ程ならば、寧ろ當初より

新聞記者とならぬが得策である。而して徒らに勉強する計りでは足ら

ぬ、好んで面倒を見なければならぬのである。それ計りでは足らぬ。

(第五) 精確を好ねばならぬ。如何に精確を期しても、新聞紙には、

必らず多少の間違はある。吾人は孔子が春秋を作りたる心持にて、新

聞紙を作りては、矢張り間違は免がれぬのである。なせなれば、新聞

紙は、其日の事を、其日に報じ、其時の事を、其日に論ずるものなれ

ば、如何に兩端を叩き、如何に表裏を察し、如何に輕重、眞偽の權衡

を取り、試煉を爲しても、とても間に合ふ筈はない。そこで新聞記者

たるものは、文學的良心の最も彈力ある人で、一寸したる間違でも、

眞に其の間違を不愉快と感じ、人の指摘すると否とに拘らず、全力を舉

げて精確を期するの精神的態度を保つ人でなければならぬのである。

輕心快腸にて、自から虚偽の報道や、誇張の議論を掲載する人間では、

世俗の所謂る新聞記者は、兎も角も、識者の所謂る新聞記者たる資格に

は決して適當せぬのである。

最早愈よ最後の一段となりました。

(第六) 新聞を書くが大切であるか、書かぬが大切であるか。書かぬ記者が宜いか、書く記者が宜いかといふことに付て、一言したいと思ひます。予は好んで人に異る論を立てるでは無いけれ共、我國に於ては書く新聞記者が多くて、書かぬ新聞記者が少い。けれ共新聞記者の本領といふものは書くに在るか書かぬにあるかと言へば——全く書かぬと言へば、モウ新聞は無くなつて仕舞ふから夫は勿論書く方にあるでありませうが——書かないといふことも、餘程大切である。人爲さる所あつて、初て爲すべしであつて。どうも新聞記者は聞いたことを悉く書く、見たことを悉く書く、知つたことを悉く書く、思たことを悉く書く、考へたことを悉く書くといふやうな風では、それはどうもい

けない。底無し袋の記者は、とても立派な記者になるとは出来ませぬ。新聞記者即ち眞成の新聞記者の成功には、何が大切かと言へば、信用が一番大切である。ア向より新聞記者が來た、彼は素破抜の隊長であるから、是は隠さなければならぬといふやうな風に、皆が用心をするやうになつたら、新聞記者の天地は狭くて仕方が無い。彼の前に秘密書類を出して置かうが、如何なる内所話をしやうが、如何なるさわどいことを言つて聞かせやうが、書くべからざることは決して書かない。書ひて呉れると頼んでも書かない。斯う云ふ信用があつてこそ、其人の門戸といふものは何處にも開くのである(拍手)其人の信用が何處にもある。それで書く新聞記者より書かぬ新聞記者が必要だと云ふ論もあるのだ。即ち知る領分が十であれば、書く領分が三つで、あと七つは必ず自分の秘密箱に收めて置くといふやうな風の新聞記者ならば、

予は必らず成功するであらうと思ふのであります。

予は又しも『タイムス』の話を致しますが、第二次ソスベリ内閣の時。

日の出の政治家大蔵大臣チャーチル卿が、歳計節減論を唱へて、閣議に容られず、辭職を決心するや、直ちに『タイムス』の編輯局に駆け込み、其の主筆に面會し、斯くの次第なれば、よろしく賛成を請ひたしと申しければ、主筆は儼然色を正ふし、閣下の辭職は、國家の爲めに、甚だ不利にして、閣下の舉動としては、似合しからず。固より本紙に於て、反對せざる可らず、されば折角打ち明け給ひし秘密なれども、閣下辭職の一事は、徳義を守りて、本紙には掲載せざる可し。何れの社になりとも、御出掛けありて、御相談然る可し。そこでチャーチル卿も、今は詮方なく申す様、貴下が賛成せざればとて、一度明たる事實を、遠慮せらるゝにも及まじ。其事實は事實として、勝手に評論

せらる可なりと。此は双方に取て、面白き美談ではありませぬ乎。

新聞記者になるところの方々に願ふのは、足が達者であるやうに、それから眼が能く利くやうに、さうして別に革靴も何も要らぬから、非常な大きな、非常な安全なる、秘密箱といふものを持つて、御歩きになつて。總て見たこと、聞いたこと、或は自分の考えたことを、其秘密箱の中に、チャント仕舞つて貰ひたい。而して例へば貴君方が七十年なり八十なりになつた時に、新聞記者の回顧録とでもいふやうなものを書いて、其時には其秘密箱をスツカリ明けて、御出しになつたら、それこそ子々孫々までも、面白き讀物となりましやう。即ち當世の新聞記者たるばかりで無くして、百年の後までも、新聞記者として、百年の後の人まで、益し且つ樂しますることが出来るであらうと思ふのであります。

子の申上げたいところの新聞記者の心得の一斑は是であまするが、兎に角今日我邦に於てマア豪い記者もあり、結構な記者もあるけれ共。時としては御承知の通り、豫戒令とか、浮浪罪とか、脅喝取財とかいふやうなもの、一半は、此の新聞記者を本家本元として、此中から湧き出る様な現象では餘程困ると思ふのである。斯う云ふことは畢竟未だ新聞記者の階級が充分に發達せぬからであつて、此の政治學校の如き所から、正則な教育を受けて、立派な新聞記者が出来る時に於ては、斯う云ふ醜類の跡を絶つは勿論のことであつて、新聞記者が本當に輿論の木鐸、社會の耳目となる日の遠きにあらざらんことを、予は松本校長及諸君の爲に禱ります(拍手喝采)

讀書論

頃る或る貴婦人間に、讀書會なるもの組織せらる。其要は毎日三十分間以上、讀書を事とするを以て、會員の義務と爲すにあり。ウエ・ストン、パーク・兩嬢、此れが名譽員たり。記者偶ま該名譽員の宅に於ける、其の發會式に招かれ、講述する所ありき。左に掲ぐるは、其の概要也。

有體に云は、我國には、婦人の方々は、申すも更らなり、男子に於ても、讀書人は乃ち多からず。固より學校に於ては、隨分書籍と首引きする人もあれども、一たび學校の門を出づれば、乍ち書籍と絶交するもの尠しとせず。一言すれば書籍は、書物讀みなる特種の専門家の讀む可きものにして、普通一般の人は、書籍を以て、殆んど無用の長物

視するものすらなきにあらざる。昔はシセロ語りて曰く、室内に書籍なきは、猶ほ體內に精神なきが如し。是れは餘りに書籍を重んじたる言葉なれども、其中には一片の眞理なきにあらず。兎も角も我國に於ては、所謂る藏書家なる特別の家を除けば、普通一般の家に於て、書籍は、概して家具の最少の部分に屬するものに似たり。英國の學者マーク、バチソンは、英國中等社會の人士が、其の書籍の爲めに支辨する經費の僅少ななるを慨し、一年一千磅（約一萬圓）の歳入ある人士が、一週に一磅（約十圓）を書籍の爲めに使用せざるを以て、驚く可き怪事となせりと雖も、我國の比例は、更らに甚だしき懸隔なくんばあらず。知らず我國の中流以上に於て、其の所得の二十分一を、讀書の爲めに使用するもの、果して幾許かある。

教育の普及は、我が國民の最も誇りとする一なり。即ち就學兒童は、學齡全數の百分の八十餘に達するを以て、之を證す可し。然も英米諸國に於ては、一冊の小説にして、十五萬部乃至二十萬部に達するもの、往々其例あるに係らず。我國に於ては、最も賣行き多き小説に於てすら、僅かに四五萬を超ゆるものは罕れなり。讀書は未だ我國に於ては、國民的嗜好の一に數ふ可らざるが如し。吾人は此の嗜好を奨勵するの、國民的品性涵養の上に於て、甚だ大切なるを感ず。讀書にも類多し、或は其の職業の爲めにするものあり。例せば辯護士が法律書を読み、醫師が解剖書を読み、英語の教師が、英語の書を読むが如き是れ也。或は自個の心靈を養ひ、智見を研くが爲めに然かするものあり。新舊約書、論孟、其他佛典、或はプラトンの哲學アレリアスの靜思錄の如き、降りて近世諸大家の著書、概ね此の部に入るも

書を讀むには主として如何なる處に於て其の如く考ふべし

の多し。或は娛樂の爲めに讀むものあり。即ち此の場合に於ける讀書は骨牌や、碁や、將棋を遊ぶと一般、或は精神の疲勞を慰めんが爲めに、或は無事を消せんが爲めにするもの也。

吾人は斯く分類するも、實際の上に於ては、其の區別必ずしも明劃なる能はざるものあるを知らざる可らず。職業の爲めに讀む書物も、必ずしも吾人に慰安を與へざるにあらず。又た慰安を與ふるもの、必ずしも吾人の心智、靈能を練磨、啓發せざるにあらず。故に吾人は書を讀むに際して、其の主とする所如何を考ふ可しと雖も、之を推し及ぼすに於ては、何れの分類に向ても、直接若しくは間接に、通用せざるものなし。苟も通用せざるものならば、そは如何なる主旨よりするも、一讀するの價值なきものと知る可し。併し今茲に讀書の題目に就て語らんと欲する所は、寧ろ職業の爲めにする以外のものとす。

書籍の撰擇の

但○吾○人○は、我○國○の○今○日○に○於○て○は、上○記○の○分○類○中○に○於○て、最○も○現○金○的○な○る○職○業○の○爲○め○に○す○ら、之○を○事○と○す○る○人○の、甚○だ○多○か○ら○ざ○る○を○嘆○せ○ず○ん○ば○あ○ら○ず。

讀書に就て最も緊切なるは、書籍の撰擇なり。書籍とさへ云へば、何れも一切平等視するは、大いなる僻事也。總ての事物に善惡、醜美あるが如く、書籍にも善惡、醜美あり。特に僅少の時間を、若しくは僅少の財囊を、讀書の爲めに使用せざる可らざる人は、頗る嚴密に撰擇するの必要ある可し。若しそれ撰擇の標準に就ては、必ずしも一定の法則ある可しと思はれず。されど吾人若し手當り次第に、書籍でさへあれば、讀む可き價值あるものとの妄想を排し去らば。其の善且つ美なる、少くとも健全なる書籍を求むるに於ては、幾多の便宜は、自から生ず可し。其の著者は何人ぞ。其の書籍は、如何なる感化を、

社會に及ぼしたる乎。而して如何なる種類の人に愛讀せらる乎。苟も是等の點に就て、討尋せば、中らずと雖も遠からざる可し。此に於てか吾人は、古書の決して等閑にす可らざるを見る。西哲曰く、歳時は四事を推薦す、古木は焚く可く、古酒は飲む可く、古友は信ず可く、古書は讀む可しと。吾人は古書必らずしも悉く讀む可しと謂はず。特に評判高き書籍にして、今日に於て、半文の價值なきものなきにあらず。何となれば彼等は或る場合に於て、或る目的の爲めに著述せられるものにして、今や既に其の用を済ましたるものなれば也。されど或る古書の今日に儼存する一の理由は、幾多の生存競争を経て、其の存在す可き優秀の本質あるが爲めに然るものなきにあらず。是れ吾人が或る古書に向て、尊敬を拂ふ可しと爲す所以なりとす。吾人は或る古書と謂ふ、總ての古書と謂はず。

古書讀む可しとせば、今書は讀む可らざる乎。何んぞそれ然らむ。吾人をして近代の思想と觸著せしむる捷徑は、今人の著作に若くはなし。但だ其の撰擇に於ては、特に意を用ゆるの必要あるに似たり。標題の奇巧、装釘の美雅、或は文章の斬新、問題の近接なる等、今人の著書、頗る吾人の好奇心を動かすに足るものなからず。然も吾人は決して古書を尊び今を卑むにあらざるも、不健全なる書籍に食傷せざるを勗めざる可らず。縦令食傷せざる迄も、時間と金錢とを徒費するは、決して此の多事の世に處する所以にあらず。

且つ今書にせよ、古書にせよ、如何に吾人が撰擇したる書籍なりとするも、一たび之を繙くに際しては、其の書籍中より、更らに撰擇す可きを忘る可らず。孟子曰く悉く書を信せば、書なきに若かずと。吾人は之を以て讀書の要訣と認む。如何る場合たりとも、吾人は書籍に向て

盲従す可き義務なし。乃ち聖經賢傳と雖も、悉く今日に於て、甘服す可らざるものあり。只た吾人は自個の靈妙なる眼孔によりて、之を判断し、之を審明す可きのみ。但た吾人は一時の淺慮を以て、謾りに他の肝血を絞り、精思熟圖したる意見を蔑斥するが如きを戒しめざる可らず。讀書子の病は、動もすれば輕薄の二字にあり。

或は一字一句忽かに讀む可らずと言ふ者あり、或は摘章尋句は、識者の爲さざる所なりと辯ずる者あり。双方の意見、何れも一理あり。宜しく精讀す可き書籍を精讀し、警讀す可き書籍を警讀す可きのみ。其の何れに屬す可きやは、一に讀者の見る所に任す可し。而も博約一ならずと雖も、決して忘る可らざるは、其の大主旨を會得するの一事是れ也。誤解の如きは、粗心の人の爲す所にして、書を讀んで其書の要領を會せざるが如きは、讀書家と謂ふ可き理由なし。

若し吾人をして、書籍の大主旨を會得せしめんとせば、吾人は書籍其物を熟讀するの外、著者及び其の時代を知るを要す。如何なる書籍も、或る意味に於ては、著者の自傳たらざるはなし。如何なる著者も、其の時代の兒たらざるはなし。吾人若し頼山陽の何人たるを知り、而して彼が周旋したる社會と、彼を發育したる時代の何物たるを知らば、吾人は『日本外史』に於て、特殊の興味を會得する、更らに容易なるものあらむ。

善く書を讀むものは、必ず其の手に鉛筆、ペンの類を握り。必ず其の要を摘し、其の粹を抜き、他日の備忘録と爲すの勞を厭はず。或は又た其の書籍に向て、直ちに其の意見を挿入し、若くは其の最も注意す可き章、節、句に標點を施すを辭せず。サー、ウヰリアム、ハミルトンの如きは、各色のインキを以て、書籍に標點を施すを以て、一種の

摘要に値ひすとなし、之を奨説したり。記者の如きも亦た之に向て賛同するの一人たり。吾人は之を以て、他日の備忘録の代用と爲すを得るのみならず、亦た再讀、若しくは三讀の際に於て、如何に吾人が精神的情態の變遷しつゝあるかを徴するに足るを得るものあり。

然りと雖も上述の如きは、讀書の細條に過ぎず。吾人は此の如くするも可なり、せざるも大いなる不可なし。但だ何人たりとも、如何なる書を読むにも、是非其服膺す可きは、虚心、坦懷を以て、其の書に接するとは是れ也。書に接するは、人に接するが如し。若し一たび胸中に城府を構へなば、如何なる書籍に接するも、我が心靈とは、萬里の隔離ある可し。人性相距る、決して遠きにあらず。古人も、今人も、西哲も、東賢も、苟も我が靈光を披らかば、彼の靈光は、乍ち來りて抱合す可し。就中經典を読むに於て、最も此の眞率、平易なる胸懷ある

を要す。餘りに經典を尊敬し、之を神明の如く崇め遠ざくるは、決して善く經典を読むものと謂ふ可らず。吾人は古の哲人と、春風の裡に、團樂するの心を以て、之を読む可きのみ。

最後に警告す可きは、一讀したる書籍は、再讀するに及ばずとなすの妄想是れ也。固より一種の科學的智識を興ふる書籍、若くは年代記の如きは、一生涯たゞ一度目を通せば、其の用足るものあり。然れども吾人が頭腦を訓練し、吾人が心性を涵養し、吾人が智識的眼界を濶大にし、吾人が道德的感情を鋭敏にし、吾人をして人道の至境に密邇せしむるの文字は、一讀、再讀に止まらず、百回讀み來るも、決して多しと爲す可らざる也。

讀書餘錄 終

讀書固不可不思索。然思索太苦。而無節則心反爲之動。而神氣不清。如井泉然。清之頻數則必濁。凡讀書思索之久。覺有倦意。當歛襟正坐。澄定此心。少時。再從事於思索。則心清而義理自見。

明治三十八年六月四日 印刷

明治三十八年六月七日 發行

讀書餘錄 奧附
 定價 金貳拾五錢

著者 德富猪一郎
 東京市赤坂區青山南町六丁目卅番地

發行者 渡邊爲藏
 東京市京橋區日吉町四番地

印刷者 齋藤剛
 東京市京橋區日吉町四番地

印刷所 民友社
 東京市京橋區日吉町四番地

發行所 民友社
 東京市京橋區日吉町四番地

不許
 複製

民友社出版書籍目録

(明治卅八年五月改正)

- (一) 本社書籍は全國各賣捌店にて賣捌致候若し賣捌店に於て天災地變なくして賣捌かざる時は本社發送を怠るに非らずして其賣捌店に何等かの事故ありて發送を受け能はざるものと知らるべし
- (二) 斯る場合には本社へ前金を以て注文せらるれば必ず迅速に發送すべし
- (三) 注文は書名を明瞭に記送さるべし上、中、下又は第一第二等ある書籍は落ちなく之を記別せらるべし

〔明治二十年二月創立〕

東京市京橋區日吉町四番地

民

友

社

電話新橋二八五〇番

再版

千代のひかり

定價 五十錢
郵税共

右は天皇陛下御製 皇后陛下御歌を世にもめでたき久我從一位東久世樞密院副議長の筆蹟其儘精巧なる木版に彫刻し特別なる技術を以て上等美濃紙六十頁に印刷し製本清雅高尚にして眞に國民の一本を珍藏す可き稀品也

東京市京橋區日吉町四番地

國民新聞社

德富猪
一郎著

國民叢書

◎讀 書 餘 錄

近 刊

◎第 六 日 曜 講 壇

郵定稅價 四 十 錢錢

◎第 五 日 曜 講 壇

郵定稅價 四 十 錢錢

◎第 四 日 曜 講 壇

郵定稅價 四 十 錢錢

◎近 時 政 局 史 論

郵定稅價 四 十 錢錢

◎第 三 日 曜 講 壇

郵定稅價 四 十 錢錢

◎第 二 日 曜 講 壇

郵定稅價 四 十 錢錢

◎處 世 小 訓

郵定稅價 二 十 五 錢錢

◎教 育 小 言

郵定稅價 二 十 五 錢錢

◎人 物 偶 評

郵定稅價 二 十 錢錢

◎日 曜 講 壇

郵定稅價 二 十 錢錢

◎生 活 處 世

郵定稅價 二 十 五 錢錢

◎社 會 人 物

郵定稅價 四 十 五 錢錢

◎世 間 人 間

郵定稅價 四 十 錢錢

◎漫興雜記

定價二十五錢

◎文學漫筆

定價二十五錢

◎寸鐵集

定價二十五錢

◎單刀直入錄

定價二十五錢

◎經世小策

上下各定價二十五錢

◎家庭小訓

定價二十五錢

◎風雲漫錄

定價四十錢

◎第二靜思餘錄

定價二十五錢

◎天然人

定價四十五錢

◎文學斷片

定價四十錢

◎靜思餘錄

定價四十錢

◎青年と教育

定價四十錢

◎人物管見

定價四十錢

◎進步乎退步乎

定價二十錢

蘇峰雜著

◎吉

田松

陰(肖像入)

定價六十五錢

◎新

日本之青年

定價四十錢

◎德富猪一郎編 誕
久保田米億畫

生日

定價二十五錢

蘆花生編著

◎青

蘆

集

定價四十五錢

◎小思

出の記

上製定價
郵稅價六十五錢

◎自

然と人生

定價六十五錢

◎小不

如歸

上製定價
郵稅價六十五錢

◎外

交奇譚

定價六十五錢

◎探

偵異聞

定價四十五錢

◎世界
古今名

婦鑑

定價六十五錢

◎青

山白雲

定價四十五錢

櫻痴居士著

◎幕末政治家

◎懷往事談

◎幕府衰亡論

時務叢書

◎國民と人物

八

定價四十錢

定價四十錢

定價三十五錢

定價二十五錢

◎時務三論

定價二十八錢

◎^{二十世紀}新論十種

定價二十錢

◎近時の外交

定價二十五錢

家庭科學

◎第一編動物のはなし

定價四十五錢

◎第二編天文のはなし

定價二十錢

九

◎第三編 植物のはなし

郵定價 四十五 錢

◎第四編 地文のはなし

郵定價 四十五 錢

◎第五編 鑛物のはなし

郵定價 四十五 錢

◎第六編 天氣の話

郵定價 二十 錢

◎第七編 少年物 理(全三冊)

郵定價 一部二十五 錢

教育書類

◎柴田榮一 實踐進徳篇

郵定價 四十 錢

◎浮田和民 國民教育論

郵定價 三十 錢

◎浮田和民 帝國主義と教育

郵定價 二十五 錢

◎塚越芳成 功論

郵定價 三十 錢

◎山路愛壽 立身錄

郵定價 二十 錢

◎蘇國大學教授ジョン・アラツキ 修養論

郵定價 二十 錢

式典書類

◎土方伯、田中子題辭内外新 禮 式

定價三十五錢

◎宮内大臣題辭 宮 中 儀 式 略

定價一圓

十二文豪

◎塚越芳 外 柿 本 人 磨 及 其 時 代

定價四十錢

◎濱田佳 澄 著 外 シ エ レ ー

定價二十五錢

◎米田實 著 外 バ イ ロ ン

定價二十五錢

◎緒方維 嶽 著 外 シ ル レ ル

定價四十八錢

◎ 號 外 シ ヨ ン ヂ ン

定價二十錢

◎ 第一卷 カ ー ラ イ ル

定價四十八錢

◎竹越興 三 耶 著 第 二 卷 マ コ ツ レ

定價四十八錢

◎山路蘭 吉 著 第 三 卷 萩 生 徂 徠

定價四十八錢

◎宮崎八 第四卷 ヲルツナルス

定税價 四十八錢

◎高木伊 第五卷 ゲー

定税價 四十八錢

◎北村門 第六卷 エマルソソ

定税價 四十八錢

◎塚越芳 第七卷 近松門左衛門

定税價 四十八錢

◎山路彌 第八卷 新井白石

定税價 四十八錢

◎人見一 第九卷 エーゴ

定税價 六十三錢

◎徳富健 第十卷 トルストイ

定税價 二十五錢

◎森田思 軒遺著 第十卷 頼山陽及其時代

定税價 八錢

◎塚越芳 第十二卷 瀧澤馬琴

定税價 六十五錢

傳記類

◎山路吉 著 孔子論

定税價 六十五錢

◎民友社 編 露國皇帝

定税價 二十五錢

◎民友社 編 勝海舟

定税價 六十五錢

◎塚越芳熊
大耶著熊

澤 蕃 熊 山

十六
郵定價 八十
錢錢

家庭叢書

◎第一卷 家庭の和樂

郵定價 二十
錢錢

◎第二卷 夏の家庭

郵定價 二十
錢錢

◎第三卷 玩具と遊戯

郵定價 二十
錢錢

◎第四卷 家庭教育

郵定價 二十
錢錢

◎第五卷 小兒養育

郵定價 二十
錢錢

◎第六卷 家庭衛生

郵定價 二十
錢錢

◎第七卷 家政整理

郵定價 二十
錢錢

◎第八卷 簡易料理

郵定價 二十
錢錢

◎第九卷 社交一斑

郵定價 二十
錢錢

◎第十卷 婦人と職業

郵定價 二十
錢錢

◎第十一卷 外家庭理財

郵定價 二十
錢錢

十七

◎ 號 外名士と家庭

郵定價二十錢

◎ 號 外紫式部

郵定價二十五錢

◎ 號 外清少納言

郵定價二十三錢

十八

娛樂書類

◎ 加納子爵序 水泳術指南
◎ 村田析著 球之友
◎ 守山恒野 太郎著

郵定價三十五錢
郵定價四十五錢
郵定價四十五錢
郵定價四十五錢
郵定價四十五錢

◎ 名人小野將五平編纂 棋秘訣

郵定價四十錢

文學書類

◎ 惠磨遜の書簡

郵定價三十錢

◎ 山路愛懺 山著 悔

郵定價四十錢

◎ 千葉紫草著 笑 魔

郵定價二十錢

◎ 日本文學梗概

郵定價二十錢

◎ 名家紀行文選

郵定價三十錢

十九

◎森田思一 小品

定價三十五錢

◎ザカトル、ニーゴ 懷

定價四十五錢

◎湖邊子 歸省

定價四十五錢

正岡子規君 閣並序 下村爲山君
高濱虛子君 序 上原三川君
河東碧梧桐君 序 直野碧玲君
共編挿畫四季三十餘

◎新俳句

定價六十五錢

◎歐文對照 一千金

定價二十錢

◎一語 一千金

定價二十錢

歷史類

◎瀨田佳澄著 日露外交十年史

定價八十五錢

◎武田源近 時極東外交史

定價四十五錢

◎平田久著 十九世紀外交史

定價六十五錢

世界國勢書類

◎外務次官珍田捨巳序 省編纂 西伯利亞及滿洲 郵稅價十一 錢圓

◎後藤新平序 田原頑次郎譯述 露國の闇黒面 郵稅價八十五 錢錢

◎中西牛郎 漢譯 俄國 如是 郵稅價八十五 錢錢

◎後藤新平序 田原頑次郎譯述 露國皇室の内幕 郵稅價八十五 錢錢

◎外務省 調查 最新日清韓露地圖 郵稅價二十 錢錢

◎奉天遼陽附近明細地圖 郵稅價二十 錢錢

◎井上雅 二著 中央亞細亞旅行記 郵稅價六十 錢錢

◎露國政府編纂 日本民友社譯述 露國事情 郵稅價十二 錢圓

◎平田 久著 露西亞帝國 郵稅價三十五 錢錢

◎山本庫 太郎著 最新朝鮮移住案内 郵稅價四十 錢錢

政法書類

◎選 舉 必 携 郵稅價四十 錢錢

◎ウエストレーキ原著 深井英五補譯 國際法要論 郵稅價一圓五十 錢錢

◎米國ローエル氏原著 民友社譯述 政府と政黨 郵稅價二圓八十 錢錢

◎農商務省 山林局編纂 林野法令 郵稅價四十八 錢錢

遺稿類

◎小楠遺稿

上製金一圓五十錢
並製金一圓二十錢
郵稅金十六錢

社會及經濟書

◎民友社 近時の戦争と經濟
 ◎小西孝勤 儉儲蓄の志をり
 ◎支那貿易事情

定價一圓五十錢
郵稅金六錢
 定價二十五錢
郵稅四錢
 定價十圓四錢
郵稅四錢

雜書類

◎古文舊書考

島田翰著 全四冊
日本製四號活字美本 定價金三圓五十錢 郵送料金十五錢

◎育兒と衛生

定價二十錢
郵稅四錢

◎矢津昌地理學小品

定價三十五錢
郵稅六錢

◎石黒忠彦男談話翁叢話

定價二十五錢
郵稅四錢

◎東京市役所(第三)東京市職員錄

定價六錢
郵稅二錢

國新民聞

東京市京橋區吉日吉町四番地
電話新橋七〇三九二五
國新民聞社

國民新聞の發行部数は、近年其の増加をなしたり、其の紙面改良の結果たるもの、漸く一般に認められたるに、漸く一般に認められたるに、漸く一般に認められたるに、

世界に於て我が日本を代表するもの、國民新聞なり。其事道俗なれども、紙面の品格が墮したる事なく、紙面の品格が墮したる事なく、

國民新聞の讀者は社會の各階級に渡り、然かも其の効力を甚大なるものと云ふまでもなし。況んや東京の或る所、國民新聞の發行部数は、近年其の増加をなしたり、其の紙面改良の結果たるもの、漸く一般に認められたるに、

定額 一月前 金貳圓
三月前 金貳圓
六月前 金貳圓
一年前 金貳圓

日本郵政 郵便 五圓
日本郵政 郵便 五圓
日本郵政 郵便 五圓

廣告 廣行 字十九
廣告 廣行 字十九
廣告 廣行 字十九

民友社書籍賣捌所

注意 此に列擧する賣捌店は本社直接に取引する店又は特別に記入申込ありし分に限る。故に全國に於て間接に賣捌がある店は此他に多數ありと知らるべし。

東京市神田區真神保町	上田屋	同	赤坂一木町	山口書店
同 表神保町	東京堂	同	麴町區飯田町	神戸書店
同 京橋區銀座西ノ六	東海堂	同	麻布六本木町	北原書店
同 京橋區館屋町	北隆館合資會社	同	本郷春木町	小杉商店
同 京橋區采女町	警醒社書店	同	本郷四丁目	文光書房
同 京橋區出雲町	新橋誠堂	同	本郷區春木町	文光書房
同 日本橋區人形町通	至誠堂	同	同	文光書房
同 赤坂區青山南町	山陽堂	同	同區元富士町	文光書房
同 京橋區館屋町	良陽堂	同	同半込區原町二丁目至一	田中書店
同 京橋區弓町	松野孫吉	同	同半込區肴町	關屋盈科堂
同 芝區三田四國町	天野書店	同	同本郷區元富士町二	新文館
同 芝區愛宕町二丁目	中島百華書院	同	大阪市備後町	吉岡書店

大阪市北濱四丁目五十六國民新聞社出張所
 同 備後町 岡島新聞舖
 同心齋橋筋淡路町北へ入中村正兵衛
 同西區常安橋南詰四へ入文德堂
 大阪市東區 福音社
 南久太郎町四ノ二〇
 京都市佛光寺通り 東枝律書房
 同三條通富小路四へ入 便利堂
 北側 寺町通り 飯田信文堂
 同 河原町 大黒屋
 同二條通り河原町東へ入寶文館
 同 丸太町寺町四 前川書店
 横濱市吉田町一丁目 第一有隣堂
 同 伊勢佐木町 勉強堂書店
 同 野毛町 第二有隣堂
 横濱市吉田町一丁目 金海堂
 神戸市元町五丁目 吉岡支店

同市 元町五丁目三十四石九日東館
 同市元町一丁目 川瀨日進堂
 名古屋市本町 川瀨代助
 同 玉屋町 靜觀支店
 廣島市鹽屋町 積善館支店
 同 東横町 弘文館
 同 大白町二丁目 東澤兼太郎
 東京府下八王子町 須田正進堂
 山城國向日町 熊澤兼太郎
 丹波國福知山柳町 足立攻城館
 同 大阪府豊能郡池田新町 越山文進堂
 丹波國柏原町 鹽川豊翠館
 但馬豊岡町 中井正吉
 淡路國洲本町 由利安助
 越後水原町 成利錦堂
 同 長岡表四の町 西村六平
 目黒十郎

同 高田町 高橋書店
 同 新發田町 萬松堂支店
 同 龜田町 潤身堂
 同 尼瀨 佐藤清三郎
 新潟市古町通 北藤光三郎
 長崎市野屋町 安中半三郎
 同市 集榮堂
 武州川越町 集文會
 武州兒玉町 中村文會堂
 千葉町 大澤郁文堂
 千葉縣長生郡茂原町 松本順一郎
 千葉縣四街道 梁瀬書店
 水戸市柳町 寺井文明堂
 茨木縣水海道町 新々堂
 茨城縣石岡町 國文堂
 上州富岡 木田商店

上州原町 山口商店
 上州桐生町 大出三泉堂
 宇都宮市大工町 内山商店
 野州足利町 三泉堂
 伊賀國上野農人町 安屋勝次郎
 伊勢國松坂 清玉堂
 三州豊橋 富田安一
 遠州掛川町 叢文堂株式會社
 靜岡市吳服町 内田書店
 同 同 太盛堂
 甲府市櫻町 眞盛堂
 大津市 文泉堂
 近江長濱町 同支店
 美濃大垣木町 渡邊商會
 飛騨高山町 平田鈴吉
 長野市 齋藤祥三郎

同市
同市
同市新田町
信州上田町
同 上田町
同 野澤町
同 岩村田町
同 松本町
同 町本町二丁目
同 洗馬
仙臺市國分町
同 大町
同 新原馬町
同 福島縣福島町
同 白河町

西澤喜太郎
信濃毎日新聞社
萩原朝陽館
西澤文支店
百合舎
岩下新聞舖
文盛館
鶴林堂
慶林堂高美書店
都筑文明堂
佐勘書店
木文書店
但木芳次郎
漸進堂
鈴木萬助
奧村書店

同 白河町
盛岡市
陸中一ノ關大町
青森市
同市
弘前市
青森縣八ノ戸
山形市
同市十日町四百二十六
秋田市茶町
同 市縣廳脇通
羽後國増田町
同 大館町
同 酒田上中町
若州小濱

石井書店
鶴鳴閣
文港堂書店
鎌田書店
青港堂
桂華堂
伊吉商店
伊文字書店
荒井明治閣
成見清兵衛
大島開成堂
東海林書店
越後屋虎五郎
中村書店
吉岡昌太郎

福井市佐枝町
同
石川縣小松
金澤市
同市
能登飯田町
富山市東四十物町
同市
高岡市寺山町
越中川邊
鳥取市上魚町
同市智頭
同市東町八十八番地
伯州弁吉
松江市

日新堂
品川書店
宇都宮書店
同支店
佐久間商店
河內勇作
中田書店
小林清重堂
學海堂
弘文堂書店
山本吉太郎
藤谷旭日堂
久松堂書店
鳥飼榮藏
川岡清助

同 市天町
同 市弓之町百三番地
同 市西大寺町
同 市丸龜町
同 市上元町
作州津山元魚町
備中井原町
山口縣山口市中町
山口縣山口市
下ノ關市
周防國岩國
和歌山市中橋地蔵
松山市
愛媛縣宇和島町
同 宇和島府路通郡役所前
高知市

大蘆一年舎
周營堂
奧田金正堂
吉原弘文堂
本郷叢文堂
横山萬竹堂
萩田書店
超世館
白銀日新堂
山名書店
白銀日新堂
宮井宗兵衛支店
向井藏次郎
日進堂書店
杉山靜清堂
開成舎